

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十五年九月二十五日 印刷  
昭和四十五年十月一日発行 (毎月一日発行)  
(第六一号)



No. 61

45年度 二賞発表

十月号

# 川柳塔社主催

## 45年度 二賞発表句会と同人総会

日時 十月四日

同人総会は三時から  
二賞発表句会は六時から

会場 以和貴荘

河筋野区松崎町二丁目  
(電話…6222・1275番)

柳話 中島生々庵

表彰 二賞の受賞者

兼題

〔祝〕杯 浜田久米雄選

〔アイデア〕清水白柳選

〔運〕勢 北川好郎選

〔名〕言 北川春巢選

席題 (当日二題発表)

会費 二百円

★同会場で宿泊が出来ます・予約至急

★同人総会のご案内は出しませんが、出席者によつて採決させていただきます。

★11月の兼題 「本心」「免許証」「ラッキィ」

川柳塔社常任理事会  
「二泊三日」

## 大阪文化祭(第22回)川柳大会

日時 45年11月23日(祝) 11時開場・午後0時半開会  
会場 大阪市中央公会堂 (3階・小集会室)

句集	賞	宛	先	締切	投句	席題	兼	題	講演
入選句集希望者は一〇〇円別送のこと	市長・府市教育委員長から「川柳賞」 選者から「選者賞」を贈呈します	席題・兼題とも秀句に、府知事・大阪	(530) 北区中之島1大阪市教育委員会内 大阪文化祭川柳大会係 または、せんば川柳社・川柳瓦版の会 川柳塔社・川柳文学社・番傘川柳本社 でも投句を取次ぎます	11月10日着限	各題ごとにハガキ1枚に2句ずつ 住所・氏名 雅号を明記して郵送	当日2題発表 (11時開場・締切正午)	閉会の辞 〔神話〕 〔波紋〕 〔公害〕 〔盗〕 〔窓〕	司会 閉会の辞 「窓」 「盗」 伊東静夢選 橋高薫選 西田柳宏子 前田勇氏	大阪教育大学教授 前田勇氏

背伸びももう続かぬ老いを知る姿  
おめおめと主治医漢法に負けぬ意地

中島生々庵

腰折れの団扇にびくともしない風

車椅子心の偽装ちらと見せ

紋十郎さんを悼む

酌ぎ交わす顔にも桐竹紋十郎

訂正・東奥日報社の川柳手ぬぐいは  
「一声出してみたいとかまきり身構える」

## 鉢 摺 欠 け

台風一過という言葉がある。今年は当り歳ともいわれているが、台風の一荒れは千億円と相場がきまつてるそう。それが二回・三回と続いては莫大な損失で、その上ゼニカネで計算出来ぬ人命の尊さを考えると、全く気の遠くなる程の額である。それが一夜にしてふっ飛ぶ。時には復興も進まぬ間に追い討ちを喰うことさえある。この失なわれた金の半分でもいいから福祉や文化事業にまわせばたと誰しも思うところである。これは一寸筋違いの話ではあるが、お茶席に招かれたと

する。ほの暗い茶室で浮世の俗塵を逃れ我執を去るせめてもの一刻と言うのが茶の味わいであろう。ところが床の茶掛、茶杓、さては茶椀とご自慢の豪華揃い。もし粗相でもしたらと順に回わって来るお道具拜見が台風の眼の様に思えて手がふるえる。こんなのは私という人間が出来てないせいだろうか。「高価な器物を愛するは心利欲に走るが故なり。欠けた摺鉢でも用がたりればそれでよい。これが茶の心だ」と言った利休の言葉を思い出すのは負け惜しみだろうか。

# 川柳塔十月号目次



座右の句

俺に似よ 俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

立読みの間に止んで傘忘れ

金井文秋

欠けた摺鉢 ..... 題字・中島生々庵・表紙・直原玉青  
 川柳塔：(同人作品) ..... 中島生々庵：(1)

常に路郎先生のお傍に ..... 中島生々庵選：(4)  
 川傍柳初篇研究：(八十七) ..... 小西無鬼：(2)

前田喜代人・岡崎重義・清  
 川端柳風・故高須唾三味丸  
 博美・藤井和雄  
 十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品：(3) ..... 麻生霞乃：(28)

川柳日記 ..... 東野大八：(46)

名妓連とからゆきさん ..... 北川春巢選：(30)

近作柳樽 ..... 西尾栞：(42)

秀句鑑賞 ..... 若本多久志：(43)

..... (同人吟) ..... (43)

## 常に路郎先生

### のお傍に

小西無鬼

「おれに似よ俺に似るなと子を思ひ」の大きい横額を座敷に掲げて居る。故路郎先生の名句である。

「古くとも僕には仁義礼智信」同じく御存知路郎先生の名句であり、同じ大きさの額は篠山小学校本館大広間に掲げてある。実は二枚共先生を篠山へお迎えした節、特に小生御無理申して御快諾を得て御揮毫願ったもので表具師に横額表装させ、二枚共篠山小学校に寄付するつもりで居た。寄付は町長に話して学校長が受納するが、当時の町長の寄付者に対する言葉や態度に感謝の心も籠って居ない様で腹が立った私は、それでも校長にも話して居る事として「古くとも」の額面を納めて「おれに似よ」の額面は家に飾ったのである。今にして思えばこれが幸であったとつくづくうれし

九輪抄

清水白柳選

(44)

路郎賞・川柳塔賞発表

高鷲亜鈍

(38)

敗けたから

諸家

(17)

近詠

醉々・鬼遊・史好・虎声

(39)

苦言あれこれ

水粉千翁

(53)

雅号ぶっちゃげばなし

本田恵二朗

(52)

初歩教室

清水白柳選

(54)

大萬川柳「立場」

阿万万的

(55)

電照菊

(薰風)

(56)

柳界展望

(庸佑)

(50)

本社九月句会

(文秋)

(60)

各地柳壇

小幡里風選

(48)

一路集〔古米〕  
〔やせ我慢〕  
〔周遊券〕

若林草右選

(49)

編集後記

吉田水車選

(45)

座右の句

(路郎)

俺に似よ 俺に似るなと子を思ひ

私の句

ぼやいてもやっぱり夫婦でする話

児島 与呂志

兒島 与呂志

くなる。

從弟に校長が居る。僕に似て呑助でよく事ある時に盃を交すが、彼は額を見ては何回も云う「おれに似よ俺に似るなと子を思ひ」よい句やなア全くそうや。小西無鬼と云えば田舎で川柳家や、先生や云われて居るけどアカン。こんな句を一句作らなアカン。」「おれに似よ俺に似るなと子を思ひ」か、よいなアと又しても云う。僕は路郎先生の教え「いのちある句を作れ」をモットーに川柳人として、せめて一句後世に残る句を作り度いと思つて居るだけで一生が勉強だと思つて人生陶冶を、心から忘れた事はないんだと反バクしたりし乍ら知らぬ間に盃の数を重ねて楽しんで居る。

「川柳ささやま誌」も二百号を迎える。川柳塔参事の肩書きを頂き乍ら投句を怠つて居るし、大阪句会へも出向けない様な家内の人的不足で悩んで居るが川柳は死んでも離さないんだあの世でも作句し陶冶に心掛けると且つて川柳雑誌に書いた事を忘れては居ない。

「心得て仲居は桜の枝を折り」の色紙は応接間に、斯くて常に路郎先生のお傍に。



中島生々庵選

青森市 工藤 甲吉

今の世の良寛さまは蹴飛ばされ

うらはらにばかり世間は甘くなし

蚊柱のまねをしている人の群

雨天順延弁当はそうゆかず

トンボめがね乗せてモテルへすべり込み

伊丹市 小川 静観堂

日本人が使う英語を辞書で引く

おじいちゃんをバカにして蟬はどれも逃げ

去年来た梟がまた啼くじゃないか

お迎火ほんとうに逢えるような気で

焼きのこしたカキモチ出して思い出を焼く

堺市 吉田 圭井堂

八兆だ九兆だどうせ他人の金

トンネルの上に住んでて井戸を掘り

ギャンブルの血圧だとは知らぬ医者

やるものがなくやけくそで二男五女

水掛けて拜んで飲んで法善寺

倉敷市 本田 恵二朗

朝げんを言うて結納早う発ち

人生街道故障と修理繰り返えし

目覚しを五時に鳴らせたうれしい日

札東で政治生命引きのぼし

万博でインド美人に一と目惚れ

和歌山市 垂井 葵水

ある仮説どうやら俺のことらしい

長電話片手にハサミまだ握り

公害のそのドン底にいる端居

後悔と焦りをつなぎ明日を組む  
熱狂のあまりでしたと蒼ざめる

豊中市

戸田古方

水掻きの動いているのに気付かせず  
だんだんと空気が水のようになり  
友白髪水のうまさがりわかりかけ  
よい方をとってアベック惹なし  
風風いできたので緑の色をほめ

門真市

福島鉄児

仏壇の中でトマトも色を増し

夏バテヘスタミナ食も間に合わず

風鈴を終日聞いて夏を病む

かんじんなこと云い忘れ受話器おく

出嫌いの妻をだまして家族連れ

大阪市

正本水客

波瀬百合(三句)

懸崖となり山百合の群生す

百合じつと雄しべが動くほどの風

人うごく気配へ百合の香がうごく

蟬鳴いて山おりきつた足になる

退屈な妥協の日々と見られまい

高槻市

傍島静馬

生生流転いまだん底を這うあがき

おじいちゃんらしくてよいという白髪

人好きはするが取柄のない男

病人に気休め云うてひがまれる

コミッションばっちはいてたことがバレ

大阪市

本多柳志

時々針をもつ娘の夏休み

PPM覚えて都会住みにくし

潮干狩りえものは金に見積られ

ヘドロとも見えずポスター海の色

減反をして豊年の盆踊り

下関市

石川侃流洞

夏やせのわびしさバンドの穴を足し

トロ箱へ緑育てて二階借り

千五百トップがピリの後を追ひ

口止めをして心配になる内緒

求人難さて停年に職がない

岡山市

浜田久米雄

よく知っているのに知らぬ顔で聞き

じっくりと養老保険の満期が来

一升瓶そろそろ腹の底を出し

寄付帳お世辞を軽く受け流し

善人の耳もつともなことと聞き

島根県

堀江正朗

郵便の今日は柳誌の届く音

奈良県 草深 醉升

言訳をもみ手しながら絞り出し

割箸を使えば客の気にもなり

見えぬから無口の客を持ってあまし

目が醒めてもう手さぐりの急がしく

倉吉市 奥谷 弘朗

ちよっとしたしぐさに行儀読みとられ

この夏を力いっぱい照るほたる

人生に欲があるから面白い

天高し果なき雲に我れを置き

じいちゃんと呼ばれうかうかしておれず

倉敷市 水粉 千翁

聞き分けて見分けて妻にとぼけられ

思い出があの木へ伸びて蟬時雨

やすらぎの茶をくみ替えて妻老いぬ

コスモスの支えも出来て雲走る

金扇の裏はおんなの泣くところ

大阪市 金井 文秋

病臥してやっと三食昼寝つき

里帰り暮しを見せる見栄もあり

売上げを何度も数え売れない日

俺がやらねばと思うている生甲斐

ない時に運のないのが借りに来る

川埋めて陸橋八百八橋かけ

よく効くと蔭ぼしにして皆忘れ

請求書まだかまだかと律義者

新築へ一足先に蜘蛛が住み

夏座敷我が物顔に蟻が匂い

大阪市 橘高 薫風

斜(はず)に見て天のひとでの大文字

大文字額の焼ける火なりけり

遠き火の小さく濃ゆし大文字

大文字酔醒めるよりはかなしや

大文字夢の多くは夢で終る

大阪市 山川 阿茶

感情の落差のきつい令夫人

風鈴も窮屈そうな軒で鳴り

脳味噌も暑中休暇をとりたがり

経典を歌舞伎の型で派手に裂き

大阪市 大坂 形水

老人病など人ごとに思ってた

万博と逆のコースを行く休暇

列作るから人気のパピリオン

地価対策一つにしても隙だらけ

大阪市 宮尾 あいき

歌舞伎十八番「鳴神」

わらのよな母へ薄幸の子がすがる  
長男の正論母は酷と聞く

風鈴もきげんなおした朝の風  
雑草の花つけたまま引抜かれ

松江市 中川晃男

クーラーに蠅も蚊もちと面くら  
人生はああしめやかな盆の雨

泣きたいときに泣ける涙の仕合せな  
寝返っていたとは知らぬ落目なり

松江市 吉岡暹児

進む世に喘ぎ喘ぎの灯をともし  
昼酒の心染まない色となり

ゴム紐の最期プツンと言っただけ  
心ブラで隣りの人と合う不思議

美禰市 安平次弘道

結果論みっともないぞ止め給え  
市場籠はしりを買えば見つめられ

遺産分け養子仮面をもうつけず  
満壘へ代打は祈るように立ち

大阪市 神谷凡九郎

労働力とならない人がこうも居て  
その頃はあの給料で喰ってゆけ

鏡にうつして自分がやっと見え

失保でももろてと夏を辞めてゆく

奈良市 宮口笛生

面会も途切れ病窓に秋の花  
母さんがいる梅干しの色具合

負ける事嫌いな妻で気をもまし  
のむ話のめる倅せに生れけり

京都市 松川杜的

再び山百合の泰運寺を訪う

時雨一過楓の青が更によし  
朝となる山百合朝の顔をして

昼と夜の境を一際蟬しぐれ  
好意には済まぬがボタモチ喰い残し

神戸市 仲 どんたく

母の遺体魔よけ刀が重もそうな

デパートで捕る松虫や轡虫  
万博帽国籍不明の型で行く

喘ぎ喘ぎ水銀柱へ挑戦す

札幌市 平野青夜

よう戦友俺はアルミ貨ばかりなり  
素寒貧ネクタイに凝り花に凝り

口程にない腕力を持て余し  
自由ドア隙間の風も入れて遣り

富田林市 岩田美代

ポイントをこちらへ置いて推理する

円満な常識持って追い抜かれ

持つものをもてばなる程弁がたち

いつの程消えてる妻の泣き黒子

八尾市 香川 酔々

一日を飲み干すように大ジョッキ

過疎の村時計明治の音で鳴り

河内野は佳し音頭の遠囃子

「もうかってまっか」浪華に咲く花火

鳥取県 清水 一保

道草を喰いつつ四十路歩を運び

もう一度村へ来て飛べ赤トンボ

熊本にて

熊本城攻守どちらもほめ賛え

天草五橋にて

手をつなぐように仲良く橋と島

高槻市 山田 季賛

御来光へカメラカメラは忙しい

晴天が何よりと言う山降る

しゃくなげは梅雨においでと教えられ

釣橋で写すお顔は皆つかれ

下関市 桜川 不水

世の中は変りお米が袖にされ

これからは照ってやるぞと梅雨が明け

一トさわぎさせ夕立は気を晴らし

キリギリス婿殿しよって軽う跳び

下関市 国弘 半休門

荅岐対馬にて

荅岐の夏鬼の岩屋で冷えて出る

たこ揚げの土産は小さい方のたこ

海原へ船団長のでかい夢

夕焼けて立海灘は神秘めき

岡山県 直原 七面山

紅一点の説に耳

誰れが生んだと反抗期

恋の二人の遠廻り

女の方も酔うて春

島根県 藤井 明朗

台風が慈雨豊作の山陰路

人間の孤独へ川柳が語りかけ

公害へ他人事のようにレジャー族

残暑うすれてしのびよる風も秋

愛媛県 村上 旭童

墓参りだけは済ませて盆をねる

自家用で帰り南瓜までつんで去に

台風情報どころかラジオ歌ばかり

冷奴ぐらいで夏を乗り切る気

東大阪市

久米奈良子

こもり居の母娘にはげし蟬時雨

日盛りの便りは汗で届けられ

ひたむきによせては返す女波

耳鳴りに朱の筆しばし立ちくらむ

松江市

小林孤呂二

惜しまれて白壁屋敷また解かれ

ただ耐える耐えろと拳 世に抗す

意地っ張り今日という日はもう来ない

独りでは飲めぬお酒へ妻さそう

岡山县

横山一声

雨もりを雨がやんだらすぐ忘れ

生活に追われて居るから皆達者

台風情報聞きたい時に停電し

贅沢な暮しがごみ箱にもわかり

笠岡市

木山要次

満月のされども僕の影がなく

取り戻す焦りに似たり虚無の夜

盆栽に肩身の狭い草が生え

幾人も産んだポインが重たそう

藤井寺市

西 いわを

お国はと訊き出している素性

小細工を見逃しているいい姑

行く先が見えてくるよな碧い空

初めての手紙全身汗をかき

大阪府

今 西 章 雅

走馬燈明治生れが買ってくる

テープ聞くお盆に帰れぬ女工員

持駒は歩一つピンチ救われる

暑中見舞夏ばてのぞくボールペン

熊本県

有 働 芳 仙

氷柱があるから個展見に這入り

子沢山ビール飲む子が一人殖え

裸にはなれない犬の舌の汗

立読みの知恵とは知らず恐れ入り

京都府

大 鶴 喜 由

入れ知恵をされて来たたと姑の目

汚染米何処から何処へ流れ行く

男なら前例にないこともやれ

明日判る嘘を十八平気なり

大阪府

木 村 水 洞

親のすねかじって物価気にかかり

足るを知る禅の境地にほど遠く

働ける日々がたのしい齢になり

きりぎりす鳴いてる道も大阪市

倉敷市 藤井春日

機構改革頭のすげかえだけのこと  
命まで預ける社でなし椅子を蹴り  
云うなれば中元欲しい謎だった

ままごとの母さん今はバーのママ

竹原市 山内静水

白をもつ人にたてつく気一本  
警戒を要す親爺が酌いでくれ

言い出しの男が飲めぬから愉快  
針をもつ時青年の澄んだ瞳よ

笠岡市 木山遠二

老人ホームぜいたくで行くお人も居  
齡とるにつれてわからぬことが殖え

深刻と見て世話好きが遠く居る  
長いのに巻かれた為引張られ

京都市 都倉求芽

日まわりへ夏は終った花鏝  
体質でのめぬを堅い人にされ

万博

人口増加未来はこうだと教えられ  
人人人も地面に届かない

岡山県 大森娛句楽

敗戦の憂思い出す老後なり

風鈴も拗ねてか黙る蒸し暑さ

目醒しに食べる西瓜と昼寝させ  
真清水も器の色に惑わされ

八尾市 高杉鬼遊

すぐ怒るころの底を見すかされ  
豆売りの老婆が鳩に養なわれ

割勘を押し戻されて奢られる  
僕が洗うハンカチ汚すまいとする

和歌山市 西尾公作

有料の釣場魚が銭に見え  
日曜大工おだてに乗って汗流し

古バケツに義理を立てたかトマト生る  
念入に神を拜んで句座に入る

大阪市 室谷徹舟

切り札で俺を困らす妻憎む  
かじらせる胫だ大事に大事にしよ

心から云うているのにお世辞にし  
皆までも云わず金を出してやり

大阪市 河井庸佑

舶来の風鈴外国の音がする  
涼しさを求め不自由な山へ行き

せせらぎが耳についてと旅の愚痴  
大サーピスというふれこみにひっかかり

倉敷市 野田素身郎

ピアガーデン人妻らしいのに一人  
四十の日焼けゴルフでない引け目  
営業用の媚とわかっておりながら  
脇の下の汗を悟られまいとする

倉敷市 小幡里風

女教師のホクロ噂にしてプール  
素うどんでライバル同士肚を割り  
退屈の中で矢張り金のこと  
話せばわかる誤解だったと笑い合い

米子市 八木千代

爽快なほど堂々とのろけられ  
銀婚へ子に一泊を贈られる  
あまりにもライバル視され腹が立ち  
うすっぺらな優越感の破れる日

大阪市 川口弘生

先生に様つけて老婆邪心なし  
冷房をしても額帯鏡の汗  
出世した友末席に気がつかず  
万博へおいでと云えぬ? DK

笠岡市 松本忠三

夏季手当使い果たした頃に夏  
グリーン車へ片身を狭くして通り

司会者が一言居士に乗っとられ

船頭に釣って貰った魚だけ

竹原市 森井菁居

巣を張って蜘蛛は自分の事ばかり

佗びしさは貌には出さずカンナの朱

悔恨がグラスの底を放れない

レジャーから戻ればくらしのしかかり

堺市 藤井一二三

覇気少し足りぬがと養子に迎える気

裸になって話そうともう酔っており

演説会さくら坐らす場所を振り

二人きりになって女房の愚知を聞き

岡山市 川端柳子

おたよりは度々心に書く無沙汰

暇の無い愚痴じつくりと聞いてあげ

反省と努力で平和郷に居る

それつきり死ぬとは言わぬ母の詩

竹原市 小島蘭幸

どっち向いてもわびしき日あり泣く日あり

泣くことを忘れへラヘラ悪魔

敢然と真夏に挑む恋ありき

あきらめも少しはあって決めたこと

岡山県 出原敬一

貧乏に買われ中古車いたわられ

都合よいことにそのとき酔っていた

資本家の体臭銀行の匂いする

あの齡で気の毒なこと先立たれ

下関市

志賀木石

親不孝子不孝四十代で死に

名弔辞うっかり拍手したくなり

沈痛に焼香してる債権者

税務吏が帰った途端腹が減り

大阪市

岡田某人

なで肩に眉描きおえた女形

公害試験用とは風鈴もああ

ふくみ綿吐いてコーラへ女形

松江市

岡崎祥月

雲の峰ビルの谷間に欠伸する

ペランダに風あり雲のゆくえ追う

大空へおはよう夜警日誌閉す

米子市

林瑞枝

天女いま舞い出でそうな湖の青

婚約をしてからデートの数が減り

とりたての免許信じて乗るも母

神戸市

小浜牧人

世渡りのお猿になって踊るなり

地下街で迷い地上へ出て迷い

一步二歩三歩四歩ホラママの手だ

セールスを帰して妻とかがえる

容体は昨日とおなじ注射針

雨洩りを今はなおせぬ松葉杖

星空を二つに裂いてゆく火花

扇風機中年の髪を乱しけり

女はええなあ拗ねることができ

人は皆わかることしか聞いてない

ごきぶりの叶うものなき逃げっぷり

競輪と競馬賭博とは申さず

万博は行けぬのでなく行かぬなり

大根の値段の分がない間借

ことわりのうまさ感心して借れず

もともと裸だったと負けおし

己に言いさかすつする訓示

そう言うからそういう風に見える

今治市

越智一水

愛媛県

渡辺眺童

大阪府

福井野迷路

広島県

高橋鬼焼

大阪府

有信新之助

今治市

越智一水

腕時計暮らしのつかれへまたおくれ

バラックで生きのびている原爆忌

素麺流し暑さわすれてすすり上げ

桜井市 岩本雀踊子

女房にも苔がはえて来た返事

市場籠亭主が持てばたずねられ

夕映にのびてる子の影父の影

大阪市 宮地双楽

土用波妥協の色もないうねり

公害の掃除に台風たまによい

菩薩とも話ってみ度い心澄み

堺市 新谷笑痴

公害の実験室となる日本

グリーン車の席で墓参の夏期手当

終戦日私に時計の針がない

岡山市 池田古心

団体の旅行は嫌い酒があり

九十の達者が毎日鎌を磨ぐ

陰口は知らずない智恵金で埋め

兵庫県 河原みのる

選挙もうはじまっている会釈

盆三日寺にまかせて医者休み

万パクへなびく草木となって僕

小松市 馬場魚山

遠花火消えたあとから音がくる

歯型そのままにリンゴのひとかじり

家建てて借金をする苦心談

兵庫県 遠山可住

金持ちに混雑しない道があり

伝説のありそうな枝天おおう

寒がりの女へ秋がしのび寄り

岡山市 坂井三葉

家計簿が大きく犯され夏が去る

斗志秘めたまま乾杯のグラス上げ

漫画めく夫婦で一家平和です

松江市 柳楽鶴丸

万博の感激七十七本の国旗

黒人は黒人のよさがある美人

ヨチヨチ歩きで万博の旅終り

宇部市 平田実男

遺骨抱く遺児くしゃくしゃの顔で耐え

バレリーナ楽団を蹴り客を蹴り

いつも斬るとこしか斬らぬ油売り

茨木市 浅川八郎

再入院

老いて尚空洞抱いて茨木へ

浮き世の灯遠くに遠くにかすんでる  
安静時秘かに脱走考える

姫路市 隠岐 不醉

あほオじゃと見下げていたらだまされた

自己紹介一流社長のように言い

ボテが入りたまったんやろといひ噂

守口市 羽原 静歩

垢ぬけがしていてさっぱり頼りなし

木枯しの底の底なるデクの坊

人間の宿命札束追うて行く

平田市 久家代仕男

土工夫を蹴散らして降る俄雨

田舎町山をびょうぶに虹の橋

ニンニクとレバーで夏を乗り切る気

芦屋市 丸川 初甫

リベートのある親切へ軽く逃げ

地藏尊駐車禁止のピラをさげ

ジュースより冷えた麦茶の明治型

久留米市 永松 道雄

四海波静かに暮るる万博旗

盆栽の松のくねりが一修業

カドニウム飛んで来るよな土煙り

兵庫県 大江 秋月

おしめにもならず着物を持て余し  
ローカルの気笛に合す野良の昼  
団体の飯高々と積みこまれ

岸和田市 葛城 伊三郎

御親切な新米さんへ堅く乗り

板塀の隙を気にして湯を使い

人垣の中を覗けば子犬売り

大阪市 西川 誓二

旅先のスケジュールが雨にぬれ

菓子折に云い訳けさせた胸のうち

機嫌よい父ナツメロのハミング

姫路市 村上 春巳

炎天を煙突が伸びる発電所

写経する筆を休める蟬しぐれ

天平のいらか晩夏の陽のかげり

尼崎市 高津 徹也

おふくろのもうろくさみし負けておく

里芋のおじやがうまい終戦日

戦争はしてはならない或る遺影

東大阪市 竹中 肖二

重ってもよいから礼状出しておく

国鉄のサーピス過剰涼し過ぎ

地下道を急いでおかしな角に出る

東大阪市 竹中綾女

送り火に想うはありし父母の事

万博のこんな鏡の使いよう

漬物の茄子の色よき夕の膳

大阪市 本庄金三

口先きの親切だけど礼を云い

女手で働き抜いた丸い背

黒い皮膚綺麗に剥けて秋の風

島根県 小砂白汀

淋しさに馴れております蛙の目

戯むれに孫を泣かしてうるたえる

忍耐と寛容の極あなどられ

堺市 高橋千万里

軽々と署名をたのむ重大事

我が家の人事異動は味もかえ

大望の夢は消えたが子が育つ

堺市 伏見茂美

実家絶えた母の藪入り旅を決め

冷える間もない程飲んで食べて去に

藪入りは主人の見栄も提げてくる

小松市 四方天弘美

住み馴れて祭言葉も語り継ぎ

根性の無さを多忙のせいにする

接戦となって監督数が増え

竹原市 時広一路

有難いことに気持ちの良い目覚め

空気ふと一瞬無くしてみたくなり

応分の寄附同額が並んでる

和歌山市 野村太茂津

鈴が邪魔わかる気がする猫の恋

撫で肩に自負を集めて舞納め

老妻に置物扱いされ平和

倉敷市 竹内翁童

定年へ引くてあまたの人不足

パチンコもマンガも大人が取っちまい

世論調査ほくのところはいつもこず

和歌山市 増田次章

群衆の中の一人でいる安堵

ゴーゴーを踊る境地を知らず生き

この俺を信じてつなぐ小さい手

高槻市 福田丁路

栄光の職場弾みですべり落ち

ライバルを機知と度胸でなぎ倒し

唐津市 新岡回天子

万博へ一日二日月の光を見て帰り

万博へ人工河川に寝てかえり

八尾市 古川鶴声

蝸壺を揚げればアベック引っかかり  
虫供養真夏の夜空へ燃えあがり

大阪市 中川滋雀

墨友・二級身障者認定  
身障を越えて墨池は日々新らた  
万博へ行って来るぞと武装する

和歌山市 土谷城石

高校と見えぬ机のあどけなき  
繋がれた犬へチョッコイしてる猫

自選

高槻市 若柳潮花

夏祭り浴衣の染めの匂う肌  
稽古から帰り夜食のくせがつき  
痴漢さえさわらぬ歳になつて嫁き  
朝顔とハイビスカスの咲くテレス

大阪府 不二田一三夫

社会というセットで演技する庶民  
三十の老人 六十の青年ありはあり

寄席(二句)

夫婦別れしたけど舞台はそのまんま  
そういえばあの組いつのまにか消え

★

川村好郎

息切れもするさ七十の坂登る  
死にしゅんと思えど血圧気にかかり  
病床もよし己をとり戻し  
心まで患わせたたくない祈り  
患者と医者何気なく笑い

若本多久志

飛驒高山にて(二句)

飛驒の古都深遠無量の味を秘め  
独り旅ならぬ宿舎の夜をかこち  
同型の禿げと商談難航し  
古稀近くまだ娑婆ッ気が抜け切らず  
俺よりも若いのがポツリ死んで行き

北川春巢

あたらしいレースをミニに断つ手がふるえ  
賽銭はケチリ綿菓子買う祭り  
云いにくいことという役に顧問なり  
皆様の食堂黙って値上げする  
秋空へ風呂屋気兼ねな煙を上げ

西尾 菜

ねころんで手のとどくところ趣味の本  
衝立のかけから末っ子らしいのがのぞき  
チャンネルを漫才にして母といふ

出勤の挨拶朝顔はめてゆき  
水鶏庵の風鈴廂の高さより

慣れ初めのはなしになった咳払い

菊沢小松園

重大な過失と知らぬ子は笑顔  
冷たいことずけずけ言うも第三者  
靴べらは妻の手にあり妥協癖  
寝顔なお野心の鬩り脂ぎり

## 近 詠

須坂市 高峰 柳 児

名古屋市 長谷川 鮮 山

職安で前歴の髭通じない  
左遷ともとれる辞令を重く抱き  
仲裁にプライドがあり手を引かず  
法まげぬ窓口冷たく胸を張り

大洲市 米 沢 暁 明

岐阜市 市 川 鱗 魚

影法師一生不平もよういわず  
出鱈目と知っているから咎めない  
お隣りもステテコ植木の水をやり

今治市 月 原 宵 明

今治市 長 野 文 庫

スカートの胞子を払いさようなら  
寄宿舎の窓は女のが揺れ  
靴下が右と左の型になり

和歌山市 秋 月 宏 方

小松市 山 上 千 太 郎

葬式という人生の後始末  
肺のほこり払ったときたい浜の風  
左遷地の釣の便りをうらやまれ

悪口になって女の座がはずみ  
寄附をよくすれば善人だと云われ  
冷やかに混雑を見る記者意識  
良くないと思いがらもつい過保護

せともの屋しゃがみ込むのは植木鉢  
にじますの群がりおよぐ宿の膳  
台所に音のせぬ日の独りぼち  
寝ころんでばかり根気も年にまけ

# 川傍柳 初篇研究

(八十七)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義故 高須唾三味

清 博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

635 わるひ所へ御国からよふ御出

船汀

川端||柳雨説に賛。夫婦だったら里帰りするだろうし、ここは意見に上落したのでらう。

丸||同右。

岡田||酒池肉林、杯壁狼藉のところへ、堅藏の国家老の御出。

636 椽先へ引ずって出る耳のあか

眠狐

清||「引きずって出る」という乱暴な言葉から、女房と亭主と考える。  
藤井||「ひきずって」だから「いやがる子供を母親が」と色気なしの方を私はとる。  
とかく子供はキレイになることをこぼむ性格だから。耳の遠い風をして返事をしなかった罰ではあるまいか。

高須||柳雨翁は「国家老の御出へお部屋様の当惑」と言っているが、新夫婦が連れ立って遊びに出る(芝居見物や花見とか)ところへ、実家の者(親とまでいかなくても、叔父・叔母でもよい)が出て来た。口では「ようお出でになりました」と言っているが、内心大いに当惑している情景とみてもよからう。

前田||当時は夫婦が揃って外出し、遊びに行くことはまれであった。したがって、柳雨翁の説をとる。

藤井||「わるい」と「よい」とのかけ合わせの句。「わるい所」とは「間のわるいところ」と解せば何とでもとれる。下宿の娘とよろしくやっていると郷里から突然親父さん御來襲は現代版?

前田||賛。人物は各自のこのみに――

高須||椽先は縁先で縁の先の明るい所へという意味。句意は耳クソを取ってやる人が室内では暗くて、よくわからぬからと、その人を縁先へ引っぱり出すという情景だが人物の縁先はいろいろに考えられる。まず

「引きずって出る」という言葉から母親が子供をととれるが、それでは色気がない。困い女が情夫をでもいいし、昼の女郎が禿

前田||賛。人物は各自のこのみに――

637 廻りあふ迄丸くけへ吉本さし

眠狐

岡崎||女敵討ちの虚無僧である。虚無僧は予備の尺八を一本腰に差していた。「丸くけ」は、丸くくけて、中に綿を入れた帯。「守貞漫稿」に虚無僧の扮装を説明して、

「帯の背に尺八の空袋をはさみ垂れ、別に袋に納めたる尺八を刀のごとく腰にさし」とし、その帯は「丸ぐけの帯を前に大形に結び」とある。

清二再び「守貞漫稿」を引用すると「裾ふき多く綿厚く女服の如し又女用の如き緋ちりめんの襦袢を着す多し」とあるように、虚無僧は女服に似た衣裳をしていたのである。

藤井二坊主が一本刀を帯びて女郎にあうまで医者風の風態でと解していたが、礎稿の方が「めぐりあふまで」がきいている。礎稿に賛。

高須二「一本さし」は尺八袋に入れた刀で用意のためそれは欠かせぬ。それで「めぐりあうまで」である。

丸二虚無僧の身なりは礎稿のごとくであるが、とくに「一本さし」とあるので、この一本は高須説のごとく見たい。なお清説引用もさることながら敵討ちのための虚無僧となるとそう美装ではなかつたようである。岡田二敵討ちのための虚無僧。

638 米や酒やつへし欠る俄雨

岡崎二「やつへし」はやつびし二やたらにしきりに、という副詞。「欠る」は駆るの誤字。重たい配達ものをかかえた米屋や酒

屋も走り出さなければならぬほどのひどい俄雨。

前田二俄雨に出合うと米屋から俵、酒屋からこもなどを貰い又は買い、それを頭からかぶつてかけ出す。類句が多い。

夕立に五六俵売つて米屋

雨宿り気味悪がつてこもをやり

高須二「米や酒」という上の句だから前田説よろし。「米屋酒屋」であつたら岡崎説も成り立つが……

丸二前田説賛。

岡田二同。なお礎稿に「欠る」は誤字とあるが、これは当時よく使用した宛字です。

「駆落」を「欠落」などと書いた。

639 行水をほちやりくと嫁遣ひ

### 五 鳥

岡崎二「行水に寝るほど嫁は囲わせる」(五37)が、そのお湯を使うにも、ほちやりほちやりと小さな音をしのびやかにさせるほど、おとなしい。

前田二賛。「ほちやりく」がよくきいていて妙。

清二パシヤンくくと音をたてるようでは興がさめよう。

藤井二「こそともすると居(する)風呂で嫁しやがむ」(傍二11)

高須二原本は「ほちやりく」——それで

嫁の行水が生きてくる。「ほちやりく」では子供のいたずらになってしまう。原本はていねいにうつつされたし。

丸・岡田二高須説賛。

640 月界長者二度ながら惣花

### 五 雲

岡崎二「月界長者」の月界は、吉原の異称の月宮殿と同様とみて、八月十五夜と九月十三夜の紋日に、二度ながら惣花をやるような大尽ぶりを月界長者といつた句意か。惣花は女郎はもちろん芸者、たいこ、遣手若い者などの全部に祝儀を出すこと。

清二賛。但し、月界長者はインド毘舍離大城の富豪、月蓋(げっかい)長者をきかせている。

藤井二さてもさても豪華なことよ。高須二何かのコジツケではないか。月の紋日を二度ながら惣花で飾つたから「月界長者」とは、どうも納得できぬ。当時なにかそんな大尽があつたのか。

丸二「月界長者」を清説の月蓋長者のシャレ。月見の紋日を二度惣花の奢りを見せたとは、月蓋長者ならぬ月界長者というべきお大尽である……と。

岡田二賛。紋日の費用さえ大へんなのに、一妓楼の全員に花(チップ)をはずむ。それも二度とは大変な費用。

## 45年度路郎賞受賞作品

### 握手した手が

### 離れないまま坐り



岡山県和気郡吉永町福満

浜田久米雄

## 略歴

昭和二年国鉄に奉職。大鉄川柳会に入り路郎先生、山雨楼先生、柳葉先生に師事、広島を経て国鉄局に転じ三十九年退職。

川柳塔参事

備前川柳社主幹

川柳後楽吟社顧問

現住町区長

著書に句集「凡人」

## 挨拶

中島生々庵

昭和四十五年度路郎賞並に川柳塔賞の最終決定を発表します。

路郎賞は五名、川柳塔賞は三名の推選者それぞれ既発表の中間発表を基として最後の十句を選定し、去る九月四日の常任理事会に持ち寄り、推選者の意見を聴きながら、全員で厳しい検討を加える事、数時間に及んだ。その結論に近いものを主幹の名において決定

発表する事になったのである。一年間に亘る各推選者の勉強努力は実に涙ぐましいものがあり、従って最終結論に至るまでの検討が如何に真剣であったかは読者の充分ご諒承される事だと確信する。本社がこの企画を続ける事これで第五回になるのだが、柳界に於ける評価も漸次高まりつつあるのは寔にご同慶にたえないところで、又以ってここに選ばれた榮光に輝く方々は将来に向ってますます精進を続けて頂くべき責任者でもある事の自覚を固うされん事を希望するものである。

優秀句

握手した手が離れないまま坐り

浜田久米雄

準優秀句 第一席

冷戦中なのに仲人頼まれる

野田素身郎

準優秀句 第二席

ふところの金がいや味な口をきき

有信新之助

# 路郎賞推選を終えて

若本多久志

路郎賞候補作品の中間発表制度がキツチリ三回行なわれた今年度の推選句の推奨は、例年のように数百句の中から選び出すという労苦もなく、実に軽い作業であったが、一面また粗選になったのではとの心配も残った。然し、十句を再三詠み返して左記を決定句とさせて頂いた次第である。

父の墓洗えば洗うほど淋し

越智 一水

寄りそうてすべて納得したい妻

小野 克枝

平凡な今日も一期に一会の日

戸田 古方

七人の敵を逃れて冷奴

羽原 静歩

上位下位二人がそれでいいのなら

大鶴 喜由

寄りそうてすべて納得したい妻

小野 克枝

冷戦中なのに仲人頼まれる

野田素身郎

ふり向いてみても足音だけの僕

中川 滋雀

わが腰と相談してみよう溝をとび

本田恵二郎

準優秀句

本当の涙は腹の中へ落ち

萩野鮫虎狼

優秀句

握手した手が離れないまま坐り

浜田久米雄

勿論、久しく会わない男同士の再会でありそのなつかしさが目に見えるようであり、洗練された表現は流石である。

準優秀句も深味のあるいい句であるが、やや説明じみたところが惜しい気がする。

## 表推選句

横に這う蟹宿命に逆らわず

藤井一二三

準推選句

うっとりとする愛があり無一文

天正 千梢

野良犬の誇り鎖の音がない

福井野迷路

酔っているうちは人生悟り切り

石倉 旅風

聖人のような妻なり息づまる

室谷 鉄舟

もやしさえ力一杯生きている

高津 徹也

## 一句選ぶ苦労

川村 好郎

最終優秀句十句選ぶのに、どの句を捨てようかに苦労する程佳句の多いことに驚ろいた。そして、これこそ四十五年度の「路郎賞」に値する句であると一句選ぶのに苦労する程拔群の秀句の無かったことを残念に思う。或は選考眼もぼけてきたのかと反省している。

和解した番茶つなぎの音を立て

川端 柳子

風を追え風をつかみに行けららよ

不二田一三夫

ふところの金がいや味な口をきき

有信新之助

## よく分かる句

北川 春巢

今さら路郎先生に出て頂くまでもないのだが、先生は「達意の文章を」ということをいつもいつておられた。どんな美辞麗句を連ねるよりも、普通のことばを使って、意味のよく分かる文章でなければならぬ。句についても、一般に同じことがいえると思う。気取ったことばや目新しい流行語など使つてあつても、いかにも気の利いた句のように見える句でも、作者の一人よがりや、読者には意味の通じない句がある。そのような句は頂けないのである。

もう一つ路郎賞推選句の選でむずかしいのは、選句の対象が公開されている中で、選をすることである。句会などの選の場合は、没になった句が公開されないが、路郎賞の選の場合には何もかも公開である。また年間三回、候補句の中間発表を行なつて、四カ月間に誌上に発表された数百千もの句の中から十句宛発表している。その三十句の中から今回さらに十句を選び出し、その中からまた一句の推選句を選ぶのである。これは選者の方がテストを受けているようなものである。いわば選者のコンクールである。

しかし発表された推選句は誰にも分かる句でなければならぬと思う。私は精魂を傾けて選を行なつた。そしてこのような意味でよく分かる句を推選することにした。分からぬ句ではないと思うので、いちいちの句の説明は省くことにする。

推選句(一句)

ためらいもなく一本の矢に射られ

準推選句(九句)

胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ

小野 克枝

たまに逢えば時計はつきり見ている恋

西出 一栄

安うりはせぬが長女は厄近し

小島 蘭幸

古美術にされて仏飯忘れられ

吉田 圭井堂

日めくりの早さを倅せとも思い

四方天弘実

今日もまたひとこと多き悔に寝る

森井 菁居

せめて世を美しく見るカラーにし

内藤きさ子

鑑きて突えてはならぬ人といふ

浜田久米雄

絃の悲しさ風が来てかきならず

岩谷二三枝

久米奈良子

## 難行苦行

### 西尾 栞

一年の努力の結晶をみる時、この行をやる時は、残暑尚酷しい時である。然し又楽しい時でもある。弟たりがたく、兄たりがたく、何が菖蒲、燕子花。

冷戦中なのに仲人頼まれる

野田素身郎

ふところの金がいや味な口をきき

有信新之助

力一杯笑顔を見せているベツド

浜野 奇童

水すまし池の深さをまだ知らず

森井 菁居

人間をみんな数字ではじき出し

不二田一三夫

合槌のうっかり打てぬ愚痴なるか

林 瑞枝

囃子でも入れたい子子の宙返り

桜川 不水

三日三晩啼いてこの家の猫となり

川崎 秋女

準推選句

お喋べりがすめば自分を知るだろう

垂井 葵水

自分のお喋べり——他人のお喋べり——

どちらでもよい。スラスラと詠い上げて腕はたしかなもの。喋べりの自分は一読して反省させられた。人間陶冶の詩とはここらあたりを云うものか。

推選句

さりげなく客を送って揉め直し

八木 千代

ドラマの一駒、小説の一編が斯くも十七字で充分に言い現わせるものが、川柳の川柳たるどころ。さりげなくも良いし、揉め直しも面白い。「お愛想なしで。ごゆっくりと又来

て下さいね。お氣をつけて」とねぎらわれて送られる、何も知らない客の顔がどんなでろうかと、想像するだに愉快な句である。皮肉、ユーモア、うがち、の三拍子の揃った最優秀句として推薦する次第である。

### 力強い句

#### 正本水客

一本もつれず百足急いでる

室谷 鉄舟

仏が淋しがるからも一つ泊らされ

出原 真奇

噛めば蜜したたりそつな耳たぶよ

谷垣 史好

構えれば蠅もキリリと身構える

小砂 白汀

### 審査参考

◎同一句 二回入選者

#### 路郎賞候補作

素身郎 冷戦中なのに仲人頼まれる

(葉、好郎)

新之助

ふところの金がいや味な口をきき(好郎、葉)

克枝

寄りそうですべて納得したい妻(多久志好郎)

筆不精みこして電話かけてくる

都倉 求芽

こおろぎよ何うるたえてわが膝に

山川 阿茶

俸せが逃げそう指輪まわる夜

高橋千方子

ここに來て胎兒のごとき祈りあり

(広島) 橋高 薫風

石段の中途で鐘に追いぬかれ

本多 柳志

推薦句

湖に向つて蝶の身ごしらえ

香川 酔々

美しい句だ。水の色はあくまで澄んで青く蝶の羽根は対象的に鮮烈である。大きな句だ。湖は眼もはるかに静まっている、蝶はこれに飛び立とうとして羽根を静かに動かそうとする。そこには、いささかの恐れも見えない。私達を勇気づけてくれる力強い句だ。

#### 川柳塔賞候補作

春昇 金魚すれちがう互いに目もくれず(古方白柳)

◎同一人 二句入選

#### 路郎賞候補作

菁居

日めくりの早さを俵せとも思ひ

(春果)

水すまし池の深さをまだ知らず

(葉)

一三夫

風を追え風をつかみに行け千らよ

(好郎)

人間をみんな数字ではじき出し

(葉)

大よろこびの筆

浜田 久米雄

朝めしをたべようとしていたら一三夫さんから速達が届いた。「路郎先生賞」である。読み返して見たがやはり僕の句であり「お祝い申し上げます」と書かれていた。三十七年間川柳を作つて来たばかりの生涯のなかで天位になったり優秀賞品をもらったりした会はくらかあるが、一年間の川柳塔作品のなかから、ぼくの句が一句だけ取り上げられたのは、はじめてである。ぼくは感激した。川柳を作りつづけて来てよかったと思つた。ことはぼくの還暦を記念して句碑を建てることにし、九月下旬に家の庭に出来上がる。周辺を整備し除幕式と一備前川柳社二十五周年大会は来年四月の予定である。ことは無事還暦を迎えたこと、句碑が建つことそして思いがけなくも「路郎先生賞」を頂くことで、わが生涯最良の年になった。路郎先生ありがとうございりました。速達で来る吉報にあわてたり

久米雄

#### 久米雄

せめて世を美しく見るカラーにし  
握手した手が離れないまま坐り

(春果) (好郎)

#### 川柳塔賞候補作

#### 輝親

群像の作者鬼神の外に無し  
俺でなきやつかぬライター俺のもの

(薫風) (古方)

#### 夕力子

萩葉ばかり集つて日溜りの平和  
思慕の風スリースイと蝶を乗せ

(古方) (薫風)

45年度川柳塔賞受賞作品



倅せな女に

ふだん着が似合う

大阪市生野区北生野町

小出 智子

柳歴

昭和四十二年十月好奇心いっぱい、南大阪川柳会へ飛び込みましてから、清水白柳先生、金井文秋先生始め先輩の指導から温かい御指導と励ましを頂いて四十四年十月より近作柳樽に投句、家事の許す限り玉造川柳会と南大阪川柳会にて御指導頂いております。

大正十五年十月二十八日 和歌山市小松原町に生まる。  
主婦

家族 父母 主人 二男の六人暮らし。

優秀句

倅せな女にふだん着が似合う

小出 智子

推薦者の薫風が評するように、平凡の非凡という言葉につきとると思う。日常生活の中でいつも川柳という眼鏡を曇らせないよう努力精進してゐる作者の姿がこの句の裏側によく窺える。

(生々庵)

川柳塔賞推せん句

清水 白柳

推選句

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない

河野 君子

候補句

傷心を雨の夜景にふりおとす

中筋 朋子

風の音風の中なる男親

三宅 不朽

或る瞬間愛も打算の驕を持つ

黒田 真砂

金魚すれちがう互に目もくれず

夢のよう 小出 智子

準優秀句 第一席

老夫婦縦に並ぶ歩乱さない

河野 君子

準優秀句 第二席

金魚すれちがう互に目もくれず

岡元 春昇

# 人肌の匂いの中で

戸田古方

今年は万国博の年。「進歩と調和」というのだが、ヘーゲルの弁証法流にいうならば、進歩が「正」で、調和は「反」、そのあとへ「人類の幸福、世界は一つ」というか、「合」をつけねばなるまい。川柳するもの、余りにも目まぐるしい進歩の中にあつて、「正」の正体を直視し、その「反」のため、「合」のために作句精進すべきではなからうか。

金魚すれちがう互いに目もくれず

竹原市 岡元 春昇

出ずれば七人の敵ありといひ、ひとを他人と  
いう。日本人だけでも都会人だけでもない。

人だかりのぞく時には腰がのび

守口市 岡原 達代

身勝手なお互ひ、今日の不幸のはじまり。

近よるものすべて疑う栗のイガ

島根県 小砂 白江

こういう風に人間不信となる。

うんち今日も出ずラッシュの人となる

堺市 羽田 一扇

欲求不満の不調和音のまま。

白砂青松コーラのビンが破れている

竹原市 脇本 政己

これも小さな公害か。

俺でなきゃつかぬライター俺のもの

今治市 原田 輝親

家つきカーつきババ抜きが当然となる。

庭の植おむつの竿で御免ね

大阪市 斉藤三十四

何て可愛い「御免ね」なんだろう。

枯葉ばかり集まって日溜りの平和

神戸市 来住タカ子

この安らかさを消極的という勿れ。

体臭に馴れて白衣の職に生き

島根県 中島 英子

シュワイツァ博士の温顔が浮かぶ。

推薦句

季節もの季節に喰べて有難し

大阪市 本間満津子

古句「焚く程は風がもてくる落葉哉」ほどの  
超俗でない所を頂く。これが私の考えている

「川柳道」か。

## 平凡の非凡

橘高薫風

「川柳塔賞」に選ばれるなんて、まるで夢  
のようで、感激に夜も寝むられず、知らせを  
受けた翌日になって、実感の涙をどうしよう  
もありませんでした。

何時もマイペースで着々と作句される河野  
君子さんに、何度か悩みをぶつけるのは私  
の方で、何時も困らせてばかりおりましたが  
その君子さんと共に受賞出来すことは、私  
の生涯忘れることの出来ない大きな喜びで  
ございます。

推薦句

倅せな女にふだん着が似合う

小出 智子

平凡の非凡といった句である。女自身の深  
い洞察から生まれた佳句だと思ふ。

亡き人に嫌ひ抜かれた通夜の客

小川 耕人

親もいるだろうにキックボクシング

高野 不二

こおろぎよ今日の時計も打ち終る

仮家 和美

仏ヶ浦

群像の作者鬼神の外に無し

原田 輝親

戒名はどえらい人のように見え

目賀 芳月

よき人にめぐり会えたりベンを持つ  
二十年続く賀状のみあたらず

堀江 芳子

妊らず妻は夫婦の詩を綴り

別宮 すき  
村松 酔歩

思慕の風ススイーと蝶を乗せ  
来住タカ子

# 路郎賞 川柳塔賞 候補作品 中間発表

自 四五年六月号  
至 四五年九月号

## 路郎賞候補作品

北川 春 巢

西 尾 葉

仏が淋しがるからも一つ泊らされ  
手不足というが税務署まめに来る  
そのワケで一献このワケで一献  
今日もまたひとこと多き悔に寝る  
せめて世を美しく見るカラーにし  
倅せの限界ダンスして別れ  
鎧きて炎えてはならぬ人といる  
先頭を行くロボットの無表情  
絃の悲しみ風が来てかきならす  
お人好しなどと善意を踏みにじり

若本 多久志

真奇 次章 甲吉 きさ子 久米雄 里風 二三枝 惠二朗 奈良子 醉升

寄りそうてすべて納得したい妻  
如是我聞女人一切度し難し  
平凡がいいな風呂の湯があふれ  
崩れてはならない意地のほつれ髪  
爪を切るその爪もろく老いさぎす  
風雲の維新を偲ぶ秋の雨  
清流に鍬を洗って過疎でよし  
鬼瓦せめて雀と対話する  
平凡な今日も一期に一会の日  
七人の敵を逃れて冷奴

川村 好郎

お喋べりがすめば自分を知るだろう  
停年のあいさつ廻りへ桜咲く  
仲のよい夫婦へ長屋物足らず  
売られゆく仔牛と知らず跳ねまわり  
人間をみんな数字ではじき出し  
合槌のうっかり打てぬ愚痴なるか  
囃子でも入れたい子子の宙返り  
水溜りそこから燕宙返り  
花菖蒲スタイリストを意識する  
随筆に出てくる寺に失望し  
鉢の幅魚もう全力で泳がない  
うちの子も親のとり合いしてくる  
三日三晩啼いてこの家の猫となり

かき氷話し切り出すように溶け  
頭打ち打ち人生に無駄がない  
風を追え風をつかみに行け子らよ  
寄りそうてすべて納得したい妻  
合槌のうっかり打てぬ愚痴なるか  
寝返りは恋の重さを繰り返えす

克枝 青夜 弘朗 千翁 晃男 杜的 忠三 阿茶 古方 静歩 求芽 水客 一三夫 克枝 瑞枝 奈良子

父の暮洗えば洗うほど淋し  
凡人として恙なく棺に入り

一水 醉々

求芽 水客 一三夫 克枝 瑞枝 奈良子

秋女

正本水客

あした逢う別れのようにさようなら  
 仏が淋しがるからも一つ泊らされ  
 湯の旅を帰れば急にケチ臭し  
 アルファがあることにして折れておく  
 おもしろい齡だ叱ればまた笑う  
 湖に向つて蝶の身ごしらえ  
 倅せが逃げそう指輪まわる夜  
 退屈な人を訪ねて退屈し  
 絃の悲しみ風が来てかきならす  
 筆不精みこして電話かけてくる  
 人間をこんな所で見た飯場  
 構えれば蠅もキリリと身構える

一路 真奇 春巢 形水 要次 醉々 千万子 いわを 奈良子 求芽 甦光 白汀

人と猿網を隔ててリンゴ食う  
 香水を捨てたる愛撫とつめかえる

戸田古方

人だかりのぞく時には腰がのび  
 花嫁の近所廻りに鶏が逃げ  
 人と猿網を隔ててリンゴ食う  
 体臭に馴れて白衣の職に生き  
 金魚すれちがう互いに目もくれず  
 滝の音みうちに棒の如きもの  
 占いのもうひとことを待っている  
 庭の榎おむつの竿で御免ね  
 ひと言の嘘に風船われました  
 梅雨くらし老妻の襟刺つてやる

バット タカ子 達代 一郎 バット 英子 春昇 不朽 虎城 三十四 タカ子 松花

川柳塔賞候補作品

清水白柳

傷心を雨の夜景にふりおとす  
 金魚すれ違ふ互いに目もくれず  
 母の日へ風吹きぬける子なき妻  
 透明ないのちとなって昇天す  
 別れない距離で夫の愚痴こぼす  
 靴揃え愛も情性の日が続き  
 秒針を殺して過疎の村に老け  
 砂利に似て動く歩道で行く無力

朋子 春昇 秀子 史好 八笑人 智子 豊平次 君子

桶高薫風

別居用か県営住宅三百戸  
 おふくると呼ぶ頃からが手に負えず  
 看護婦の傷に病人心配し  
 釜ヶ崎の友情唾のごと黙る  
 人と猿網を隔ててリンゴ食う  
 思慕の風スイスイと蝶を乗せ  
 倅せな女にふだん着が似合う  
 一人来てひとりに出合う花の寺  
 日曜の混みよう家がせまいから  
 陽の高いうちから仕舞う耕耘機

芳月 吐治 一歩 酔歩 バット タカ子 智子 葉子 欣彦 国彦

審査寸感

うちのいいところは、みんな温厚型の紳士ぞ  
 るいであることだ。だが、一年総決算の二賞  
 決定の日ぐらいいは、少しぐらいいは荒れてもい  
 いのではないか。

自信をもって選んだ句が、なぜ最優秀句に  
 ならなかったか？作家の代弁者として意見は  
 吐くべきだと思ふ。うまい句をとるのか、格  
 調のある句を選ぶのか、今までもっと議論  
 を交わしてもよさそうだった。その点、今年  
 の審査は例年より熱気があつたし、すんなり  
 と二賞が決まらなかったところに選考委員諸氏  
 の熱情がうかがわれた。

川柳塔のカラーを大切にしたい（好郎氏）  
 今後の活躍が楽しめる人に（菜氏）などの発  
 言は来年の好資料になりそうだ。（一三夫）

黄銅六角ポルトナット  
 及び特殊換物全般

西出螺子製作所

大阪府天王寺区空堀町八番地  
 TEL 06-3452-114  
 夜間 06-4400-18



中央は路郎先生、右は食満南北先生、左は岸本水府先生

二十九年九月号

天皇北海道へ(二句)

北の旅風の強さも身にしみん  
ああそうああそうと繰返す旅の空  
ホームラン祈る父あり母があり  
持逃げの見おさめ熱海修善寺  
凶太さは首相頬杖ついたきり  
伴もう淋しがること覚えて来  
小倅のくせに香水匂わせる  
警笛に母洗濯の手をはなし  
口答え結局二三本はつけ

二十九年十月号

誰とでも一対一で生きてゆく  
一ト駅のところを優待乗車証  
着物をやれば帯が欲しいと

「旅人」以後の

# 麻生路郎作品

3

政客のつもりか花輪やりたがり

阿波踊(三句)

そんならと踊る阿呆になるのも居  
踊らな損々わたしも入れておくれやす  
商用で来たのも踊る阿波踊  
愛人が帰りやソロバン又はじき  
愛人におこるとおこりかえされる

二十九年十一月号

事前運動僕のところを素通りす  
妻の留守猫もどっかへ出かけたり  
奥さんの座にはいるけどそれだけよ  
恋ならん 万年床をあげてくれ  
何処までも恩にきるほど年をとり  
王さんの隣り李さんガード下

二十九年十二月号

商魂があるかと養子ためされる  
文化祭美しいのは菊ばかり  
葬儀社の重役もするちゃっかりさ  
新婚は女大学笑い合い  
皇太子の噂もして女風呂  
食卓へ督促状はそっと置き  
食卓を楽しむほどに父は老い  
老いてなお回数券を売りに出る

昭和三十年一月号

吉田前首相に(二句)

大磯に埃のたたぬ春が来た  
一年の第一日にプラン無く  
四方拝ことしも約手割れるよう  
社長からして寝正月するといふ  
字劃など数えるひまも春のもの  
元日だ米ソのことは忘れよう

川柳日記

麻生 葎 乃

生駒山上にて

葉桜もまじるケープル風さわぐ  
朝晴れに坐りたい芝どこもぬれ  
展望台の一望千里もやの中  
石段を下りて一口餅の味  
老人のバッグは人と先に乗り

緑雨氏へ

死のかどで心の整理ゆきとどき

(前月号では「心」が落ちていました)



晩酌の

教授は神を信じない

豆萩に(二句)

あはははは

君までがもう還暦か

外遊をして

丹前のよさを知り

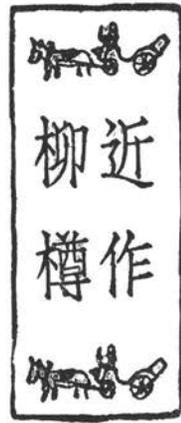
無欲さは

貰うたものも忘れて来

ポスターで

競馬の駅とのみ知られ

(清水白柳)



北川春巢選

大阪市 江城修史  
八月二日柳友島野大吉氏逝く（二句）

柳友逝く日巷に人は満ち溢れ  
年月が寡婦の心を裸にし

小走りのくせつき生涯平で居る  
疲れた疲れた対話貧しき友ひとり  
口笛に息切れ若さ遠ざかる

島根県 堀江芳子

味噌汁のうまい朝なり活気満つ  
すそわけに行けばここでも蜆汁  
あしたまた稼いでもう肩叩く

遊んでるように見えてて主婦稼業  
雷の恐さ正座を崩せない

大阪市 河野君子

ジュークボックスになつてバスの帰路楽し  
お手並みは若う撮れてて御満足

夏休み子のスケジュールに隙がない  
熱風を起こす路地裏のおしやべり  
老朽の家で虜になる大工

大阪市 小出智子

炎暑さながら隣は子を叱り  
低血圧感動のない曲を聞く  
砂のトンネル夢満載の貨車通る  
感動のない暮しに慣れた市場籠  
末っ子の作文ママがはみ出そう

竹原市 三宅不朽

八月六日美辞麗句渴き  
恋ゆえの四十の無口羨やまし  
鏡みつめながら女墮落して

馬糞にも明治の旅情をますのなり  
いつの日か帰える峠の風ばかり

大阪市 小谷葉子

終着の無い砂浜 愛は駆けめぐる

桃うれてひと待つ心恋う心

妖しきまでも匂わすひとの居て

男の構図で踊らされる私

仮面捨てれば血圧下がるのか

竹原市 脇 本 政 己

原爆の悲しみ総理は遠くいる

ナイロンのうちわでぬるい風が来る

殺ろしたのではないぞと蟬をかっぐ蟻

歩道橋渡るまじしい生まれつき

守口市 岸 本 豊 平 次

大掃除隣りは息子で羨まし

狙が財布のピンチ知った音

あの家にピンクが居たか物干台

万博が日本に帽子着せた夏

島根県 中 島 英 子

七夕の手伝い孫に邪魔がられ

文化へは遠いつるべの清水飲む

マスコミをさわがせました万国博

正直に生きて信用されて老い

羽曳野市 大 峠 可 動

風鈴の音磨かれた音で鳴り

倅せとぶつかりそうな人の群

「無」の中の虚しき酒に溺れまい

(復職第一歩)

公害の街へ生活の兵となる

和歌山県 ふきあげ 虎 城

ホステスとして猥談をリードする

蟻地獄かも昼のネオンの嘘崩れ

金粉のかがやき毒蛾らしく寝る

ささやきに愛の比重を惑わされ

大阪市 里 小 路

反対を押し切って娘の免許証

五つ月の女房で女らしくなり

孫が来てお玉杓子に疲れ果て

クーラーがきき過ぎている閑な店

岡山県 目 賀 芳 月

公害に三C山村にも迫り

女房の笑いこけてる日の安堵

大平に原爆映画エロ漫画

満ち足りて人工交配精を出し

高知市 竹 崎 寛

吾が墓地になるやも知れぬ塚を掘り

照明弾飛来母の顔妻の顔

渡河作戦隣りの兵士もう見えず  
武器よさらば地球の平和いとおしむ

八尾市 飯田 一 治

仲直りしても内心すれ違い

人生のスタート借衣装で間に合わせ  
旅先きの神話の森で鈴を振り

二度とない若い裸のエゴイズム

大阪市 大西 為二

薄情な方へ女はついてゆき

子の背中流して子供でない匂い  
現実にもどす入れ歯の洗いよう

定年になると見事な菊が出来る

大阪市 阪上 十 庵

最良の日とはだまって妻が酌ぐ  
インテリの自虐にあらず漫画本

半年のケチが二泊の旅で消え

広島市 植田 英 詩

祝い酒目出たい唄が口を切り

無精者剃らねばならぬ用もあり  
ミニ闊歩出来る平和を忘れかけ

鳥取市 藤本 鎮 也

特売のゴサ買い借間も盆が来る

就職の厳しさを知るアルバイト  
ビールならいたただきますワに活気づき

堺市 羽田 一 扇

接待を終えて茶漬を食べなおす

胃腸薬のモデルにしたい顔が来た  
即答の出来ぬ話又胃が痛む

河内長野市 井上 喜 醉

雰囲気にのまれて調子狂いだし

里帰り妻にへそくり当てにされ  
ハイミスは憎まれ口で顔を売り

小松市 村井 城 南

言い憎い事を無口がぼつんと言う

物言に順序があると吠えつかれ  
東京も大阪も来いと母忙がしい

大阪市 藤田 頂 留子

油ぜみ墓碑の読経へ和してくれ

音頭取り観光バスで御送迎  
百円の夢なかなか止められず

鳥取県 鈴木 村 諷子

表情を殺して恋の廻り道

見直したとなりの嫁のネックレス  
酌げば飲みよそえは食べる男にて

米子市 増田竹馬

一向に牙えぬ頭に神宿り

倅せは余生の仕事有り余り

二三次は部品取り替え古稀達者

八代市 船木史朗

地下足袋を履いても男にはなれず

階段を上るとき矢張り女なり

親馬鹿の目には天才かとうつり

島根県 東原福子

タイミング悪く冗談叱られる

クラス会ないしょの着物競いあい

Uターンした子と二人朝の庭

岡山県 武内雅堂

週刊誌読むすててこが寝転がり

鍵穴の暮し他人に見つめられ

絵日記にある少年の車椅子

尼崎市 中谷利美

振り向けばミニがまぶしい指定席

整形で自分の顔がない女

横顔はまだ飲み足らぬ妻楊枝

大阪市 西本保夫

養成工と対立してる平社員

エリートを横目でにらむ平社員  
更衣室では愚痴も出る平社員

岡山県 山田止水

日曜の雨が味方をしたプラン

失敗も又教訓と説く機嫌

盆栽を始めガラクタ皆貰い

守口市 野呂杜月

先ず健康それが何より内助です

忽体なや朝寝の顔に陽が当り

休耕の畔我物と曼珠沙華

竹原市 楠貞子

頼る杖のよろさを知った日の空虚

ツンとした看護婦さんの注射針

真白いベッドにあきた日の悪夢

大洲市 堀内曉風

義理立てた保険不幸を助けられ

調査団へガイド村長さん必死

怪談にあき怪獣に湧く人氣

今治市 伊藤一郎

磯迄は送り迎えの太公望

商魂は奥さん程で無い養子

着て食べて買って溜めない家憲です

今治市 真山 国彦

賽投げの覚悟入社試験受け

大人用マンガで妻に叱られる

ミニ娘翼のまわりで跳ねて見せ

高槻市 山田 スミ子

冷房へ蠅は上手に生き伸びる

叱かっては見たが結局する心配

洗濯機が目まわしている暑さ

愛媛県 小笠原 仲美

月見草去年他人で来た河原

長いものに巻かれる他はない調和

平凡と言われ円満とも言われ

愛媛県 渡辺 都留逸

前市長山羊の如くにいる余生

面白く自分の噂きいている

頭痛もち梅雨の晴れ間のシンシ張り

大阪市 木村 濁水

ミニガール座席でチラリチラリさせ

貧なれどじいさん心豊かなり

おじいさん無理せんときやと娘去に

東大阪市 斎藤 三十四

戦争を知らぬ世代が軍歌読む

かしこい嫁です口で孝行してくれる

爺亀と孫亀プールの縁をはい

新潟県 高野 不二

税金の自慢とぐちを使いわけ

草生やして金とれる世とかわり

(前月分) 新潟県 高野 不二

二次会にこうも差がある宮仕え

コンピューターに恋する心見られまい

新潟県 小林立 文月

懐旧談先ず皺が延び腰が伸び

妻の助手相勤め候大掃除

岡山県 武元 柳子

先生が棚経に見え子ら笑う

打水が済めば夕立くるらしい

島根県 錦織 文子

蟬しぐれ父の墓標へ語りかけ

真面目さが思いちがいに泣いて来る

大阪市 黒田 真砂

鉢植をふやして庭のない暮し

炎天を戻れば汗の吹く話

仙台市 川村 映輝

安住の地ではなかった墓地移転

ライバルに死なれ目標見失しない

高知県 山川勝子

夏バテか日傘訪問先へ置き

鳥取市 近藤秋星

観光写真やっぱり年だな足の線

岩壁で背伸びをすればもうソ連

目標のない地平線を追う左遷

寝屋川市 福富隆子

嫁った娘に持たす梅漬けラッキョ漬け

羽昨市 三宅ろ亭

詩心とじて風呂焚きに立ち上り

風鈴は春夏秋冬の風を知り

管理社会の中にも一寸の虫の生き

大田市 藤田軒太楼

おとろえをしみじみ思う五十肩

鳥取市 藤本和宏

動けない宿命背負う尾長鶏

公害は真綿で首を締めるよう

権力へ偏屈いよいよへそを曲げ

鳥取市 藤本恵子

ハンカチを小道具にして見合いですみ

ビールにもある嬉しい日悲しい日

河内長野市 森本黒天子

そら豆をお八つにしてる歯が揃い

万博は夏休みの孫等を寄せて呉れ

東大阪市 宮西弥生

青海島にて

岩壁で背伸びをすればもうソ連

目標のない地平線を追う左遷

鳥根県 石田清泉

媚ふくむ中の知性が寄せつけず

田んぼまで来たエリートに握手され

兵庫県 荒井良枝

ゆかしさをくの字に見せる脚線美

約束をうまくとぼける花鋏

神戸市 横山孜孝

嬉しさを言葉にすれば嘘になり

螢居ぬ里はライトが飛び通い

鳥取市 山形春海

セールの手頃ですよにひっかかり

席蹴って心にばかり穴があき

大東市 荒木鶴翠

キリギリス今は売られるためになき

暑中にもまどをしめさす光化学

泉佐野市 大 工 静 子

植えるより掘るが楽み家族連れ

現代婦盆の仏事も略式に

宿毛市 山 本 窓 花

交通禍安心出来ぬが旅楽し

冗談の失言からの溝が出来

七尾市 松 高 秀 峰

対策が難航気転の茶がはいり

ライバルが栄転してから下り坂

鳥取市 有 田 鹿 の 子

朝顔を数える朝の倅せよ

子の便りよんで寂しさ取りもどし

大阪市 河 原 林 比 呂 路

馬子唄もなく排気ガス吸う峠

共稼ぎ疲れ出したか口喧嘩

島根県 榑 原 秀 子

信じ合う母娘内緒のない会話

ピエロよもう服脱げと自尊心

大阪市 堀 口 欣 一

天下は泰平テレビのヘソ談義

夏足袋がやっぱり似合う京男

大阪市 平 井 露 芳

ドリンク剤飲んで万博へ精を出し

明日晴れと信ずる昼に星がない

新宮市 大 矢 十 郎

聴分けのない子へ財布のぞかせる

失恋の娘の悲しみは母と分け

羽曳野市 麻 野 幽 立

老身の押売婦し小さき悔

羽田空港にて

ホンジャマールとすんなりジャンボの人となり

鳥取県 両 川 洋 々

消費ブームとやらが老婆の気に召さず

レントゲン骨の痛みは撮れとらず

大阪市 岡 本 まさひろ

釜明けて万博見たさに鬼も来る

奈良の旅風さんの心境

ねんごろにしてもろてます奈良の月

堺市 栗 本 藤 持

気長く駅弁たのしむ老いの旅

試歩の庭生きる力は声出さず

宿毛市 瀬 田 美 知

よい事のありそう朝の化粧映え

灯り消しわれにかえった虫の声

水着だけ見せに女はついて来る  
安全運転すれば女は気に入らず

大阪市 白石良圭  
岡山市 谷森和風

育児書の通りすくすくとはゆかず  
出世した子ばかり持って一人住み

岡山県 本倉英峰

風呂上がり小さいヌード駆け回り  
スピードに背を向け歩む俺の道

今治市 古野伶人

朝々の涼しい内は寝て居たし  
あまりにも隙を見せない冷酷さ

今治市 今井松花

高い鯉死なさずには飼う義理が出来  
停退のかたみ盆栽分けてやり

今治市 大本バット

子が居ないから子のような妻が居る  
洗濯機買って朝晩シャツをかえ

大阪市 今井隼人

女房のおしゃべり亭主待たされる  
万博を敬老札つけ手を引かれ

大阪市 本間満津子

いさかいを避けて独り言多くなり  
おじいさん辞典にないこと知っている

大阪市 松岡茶々坊

気の弱いおかげで生きた六十年  
人情の薄さ子達も打算的

大阪市 田中多幸

お浄土から招くか父母の墓掃除  
薬より停年に水虫退治され

和歌山県 林孝風

ボーリング負けてレーンの精にする  
指切りでほのかにかよう心の血

鳥取市 藤本佳女

何も無い空へ吠えつく祭獅子  
京都府 矢野晴光

満員のバスで子供の蟬が鳴き

西宮市 丸山孔一

青田刈り就職祝いの時期でもめ  
遠太鼓伝えて古き盆踊り

今治市 原田輝親

一筋に信じて強き友まぶし

竹原市 簗田浄美  
東大阪市 落合思月

話好き同士主役は忘れられ

愛媛県 西 田 夫 生

デパートの昆虫故郷恋しがり

和歌山県 脇 本 博 美

売残りトマトはみんな青くなり

大阪市 広 畑 賛 平

指切りで大人をためす子のまなこ

和歌山県 中 西 喜 美 子

つつしみも老も忘るるこの暑さ

大阪市 村 島 秀 村

立ち飲みでええしの不義理肴にし

和歌山県 加 納 花 秀

アベックで暑さしのぎも居る火花

大阪市 岡 部 シ ゲ

指切りを照れてするよな年になり

和歌山県 塩 見 白 俊

おじいさんお掃除しますとはき出され

大阪市 吉 野 志 津

★

同人総会と二賞発表句会は、いつもの以和貴荘で開催

ご気楽とうらやまれてもぐちの種

(句会案内に会場脱落お詫び。)

## 敗けたから

### 高鷲 亜 鈍

敗けたから頭を下げる理屈ぬき  
家出する機会があるのに意気地なし  
盲でも夫は夫威張らせる

死んだ方がよいかと厭がらし  
形式が観念化するリアリズム

昨日でも明日でもない今日を生く  
反則を知らないふりのジャツジメン  
ト

鴻毛のごとくいのは浮きあがり  
火に油かけてやめろやめと観てるだけ  
星の下クリスマスあり盆があり剣みかく

トルストイが地下で続編書いていた  
有為転変ハップニングに身を任せ  
無縁仏に猫の目光る地下のぼく  
(白黒記の反響)

棺槽の中で悼辞を聞くおもい  
アバタでも暎の裏は銀の月

非情には非情をもって守る孤嬰  
歯には歯を非情は非情で守る孤嬰

禁煙が苦にならぬ自由が欲しい  
夢中に書いてる吸うている

家計簿一日新生こそ浪費

妾はやめる貴方はお吸いと云うてくれ  
母それは具象化された愛である  
父それは抽象的な愛である

辛抱をした青春が悔まれる  
壁から落ちて肋に襖間紙あてる  
骨も血も肉の要素も母から出

父母の愛自然現象でござります  
自然から離れ父母から離れている不幸

年金の酒は三日目に空となる  
己が自し食わねばならぬ人は人

夜は森閑として空想天馳ける  
想念に力が入る今日この日

噴きあがる炎へ龍の凄じい  
女優で靈感もつ女とは奇異

その日ぐらっこめば竹の骨ささる  
壁に指つっこめば竹の骨ささる  
独酌はよい深夜ひとりでちびりつつ

# これあれ言苦



人語る  
香高谷兵衛  
川杉垣井  
酔鬼史虎  
々遊好声

司會

司會 本日は川柳について、お三人の忌悼のない御意見をいただきたいと存じます。まず川柳を始めたころの話から伺いましょう。酔鬼 川柳をはじめて、人生観が変わりましたね。句をつくるというのは、自己の心の表現と思います。つまり心のうちをさらけ出すということですね。罪悪的なことを詠うこともできます。そこで、正しく生きなければならぬと考えるようになりました。史好 酔鬼さんほど、取り組んではないという気がしますが、病気で一週間寝てみるとやっぱり川柳をやってみてつくづくよかったです感じました。もともと私の性格は飽きっぽいところがあり、川柳はつまらないと思って中絶し、また一カ月たってやり出す。そのうちまたつまらなくなって止める。数年このような状態が続いたんです。しかし、川柳をやめてしまうと毎日の暮しが淋しい。この淋しさが川柳の魅力かも知れませんが、今後川柳のない暮しはあり得ないと思う。谷があるから山へ登ったときの喜びがあると思います。酔々 始めたのは、入院してすすめられたからです。もともと俳句をやっていたので、川柳をやって心配したのは、俳句とこんがらかるのではないかということでした。現在では両立ちできるという信念を持つようになりました。なぜかという、自然や人間に対して、両方でどちらでも表現できるという気を

もつようになったからです。

それは物を見るということ個人自身のものであるのだから、どう表現するかによって川柳、俳句の相違がでてくると考えられるわけです。同じ短詩型文学であり、個人の観点の主観的に打ち出すか、客観的に打ち出すかということであり、その意味で、人生観というものの幅が広がってくると思っています。

司會 それではなぜ川柳塔を選んだかということをお話していただけますか。

酔鬼 番傘の存在は知っていました。入院中に好郎先生にお教えも受け、ちゅうちよなく川柳塔を選んだわけです。

史好 それは同じですね。たまたま先生が川柳塔社という偶然でした。川柳塔に入っている柳社も知りましたが、いまでは川柳塔が一番びつたりくる感じがします。B社はなまめるいという感じだし、前衛的な社にはついていけない。川柳塔には古い所のよさも新しい所のよさもあると思います。

酔鬼 同感ですね。他の柳誌も読んでいます。鬼遊 本質的に川柳塔が合っていると思えます。

酔々 みなさんがいわれたように、好郎先生に教えていただいて、川柳塔に入ったわけです。何番目の弟子になるかは知りませんが（笑）、やはり何かの因縁だと思っています。

す。他誌や句集も読んでみました。共感を得たものも、そうでないものもありますが、やはり、川柳塔が一番ですね。

司会 それでは次に句に対する考え方を話し願います。

鬼遊 まずいえることは川柳は日本人の心だということですね。これが巧みに表現されているもの、読者に共感を与えるものが多いのだと思います。新しい言葉を使ってまだ内容の浅いものより、平易なことばであらわされた真実の心、そういうものを詠いたいものです。

史好 私はこういう句が作りたいですね。それは大らかな句、明るい句、私はそういう句が好きです。きらいなのは、理屈っぽい句、説明しないと解らない句、としよりのじめじめした陰気な句、——これはきらいですね。

川柳塔の同人欄の批判になるかも知れませんが身辺にとらわれ過ぎた小さな方が多いと思います。小説でいえば私小説的なものが多い。私小説も文学だがやはりスケールが小さい。日記を世間に発表したという感じですね。フイクツョンとかロマンというか芸術的な句が作れないかと大それたことを考えています。

酔々 同感ですね。ところが私自身はあまり自分の身辺の句はつくらないで、むしろ皮肉の句をつくりすぎる傾向がある。気持として

はロマンの香りの高い句をつくりたいのですが、むずかしいですね。

鬼遊 人間性を離れては駄目だと思います。

天地の中に人間性を表現するのは困難なことですが、やって見たいと思います。

史好 最近のぼくの句がエロチックだと言う人がある。しかしもっとロマンチックなものがあってもいいではないでしょうか。魚っぽい句はむずかしい。体験もないし(笑)。谷崎潤一郎の小説のような句もあってよいと思います。川柳の要素として何が一番大切だと考えますか。

鬼遊 一般にいわれている要素とは川柳の発生から定義づけられたものです。ウエイトはみな同じと思いますね。

史好 どれにウエイトを持たずかは、個々の川柳作家の気持ちだと思ふ。現在よまれている句にはユーモアが少ない。また本当の意味の社会ふうしも少ないですね。うそ新聞的な浅いものが多い。生活に安住して、テレビの番組などでも、語呂合せ・駄じゃれが多い。川柳でも同じことが言えるのではないですか。

酔々 川柳は俳諧から出たのだから、俳諧のもっていた味は残っています。それにふうしが増った。一茶なども川柳との接点に近い。やれ打つな、蠅が手をすり足をする。これなど川柳と言ってよいでしょう。

司会 では次に句会のあり方について語っていただきますでしょうか。

酔々 儀礼的な面もありますが、やはり切磋琢磨の場と考えます。句会に出す句は、自分なりに力を入れてあるわけですから、それに対して答えるのが、選者としての義務だろうと思います。「私の好み」云々というのは作者に対して礼を失していると思う。選者は選の基準などはっきり示すようにしていただきたい。白柳先生のようないき方に賛成です。また親睦の面からは、初めて来た方は紹介をする必要がありますのではないのでしょうか。

本社句会でもこれを実行して欲しい。本社句会では最高の句会ですから主幹は、やはり選をして欲しい。天の天は主幹の選にすべきだと思ふ。また、他社から来賓として来られた方には選をしていただくことは不要でしょう。それは、川柳観も違えば、句法も違うのですから、それより、その題について来賓の方が作られた句を被露して教えていただく方が、よほど我々の勉強になると思います。以上のことは本社句会に限ってのことです。

史好 句会には二つの目的があると思ふ。一つは親睦、一つは勉強のためです。支部の句会と本社句会の性格の違いはあります。しかし本社句会には勉強のためと考えています。現在の状況はそれに欠けているように

す。最近ではマンネリ化してはいないでしょうか、演出も必要でしょう。それから席題・兼題が多すぎるようです。

鬼遊 たしかに、どこの句会でも、題が多すぎますね、どのように句会を運営するかは、今後慎重に考えるべきでしょう。時間的制約もあるでしょうが、終日やってみるといようなこともしてみてもどうでしょうか。

司会 ではこの辺で、雑詠と課題吟について話してください。

鬼遊 私は課題吟に自分の心のできるだけ盛り込もうと努力しているのだが、どうしても作った句になってしまう。やはり本当の自分の句は雑詠でないと、言いつくせないようです。しいて言えば、雑詠にウエイトがかかりますね。

史好 私は最近課題吟がおもしろいと思うようになってきました。不得意ですがね。句会の短い時間ではなかなか作れません。しかし中には後で読むと、あっと思う句があります。砂人氏の本の中に異想をねらえとありますね。課題吟ばかりやっていると傾いたものができます。平凡だが両方とも一生懸命やるといっほか言いようがないですね。

酔々 私も二つは厳密に別のものだとは思わない。課題吟は与えられた題で考えるのだし、雑詠は自分の見たものを対象につくる。要するに自分の心で感じまた観ることは同じ

ことです。対立したものと考える必要はないと思います。もちろん得手、不得手はあるでしょう。私は席題のような短時間に神経を集中して作ることもおもしろいと思っています。

話は別ですが、各地の句会報の中には、すばらしい句が多く見られますね。そこで、これらの中の秀句も幹部の方に選んでいただいで、賞を与えるなり、川柳塔の中に、秀句としてまとめて発表するとか、したらいいのではないかと考えます。単に句会で作った句ですと報告だけではもったいない。句会の句をつくるための努力の集積は大変なものですから。

司会 機関誌川柳塔について建設的ご意見をお聞かせください。

鬼遊 同人誌として、現在のような絵花的いき方はいたし方がないと思いますが、各同人士のなぐさめ的なものではないけない。第三者に對する訴え方が稀薄になりますね。三月号から新しく設けられた九輪抄のいき方が、今後の川柳塔の一つの指標になるのではないかと思う。他誌からも注目されていると思います。

酔々 川柳塔欄の自選は止めるべきではないですか。川柳塔欄はあくまで主幹の選でしょう。その中に自選はおかしいですよ。自選欄を別につくって発表したいものですね。その

自選欄で幹部同人の方は、自分の句を少なくとも十句は発表して欲しい。それによって我々は大いに啓発されることになるんですから。

史好 初歩教室に一言、最近の初歩教室は募集句に對して批評していますが、感想やら、人生訓的な批評が多い。もっと技術的な面に力を入れてほしい。この句のどこがいい、どう直したらこうなるという具体的な面が欲しいですね。精神講話は、他の所ですべきだと思います。初心者から、川柳の作り方を聞かせるようにしたいものですね。

酔々 そうですね、添削事例は俳句雑詠でも取り入れてやっていますし、初心者はその方を望んでいると思います。

鬼遊 添削というのはいいことですね。できたらその添削の経過など書いてもらおうと思いますね。

司会 最後に全体的なこと、おっしゃりたい事があれば話してください。

酔々 川柳塔にはいるように人にすすめる社会、キヤッチフレーズが欲しいです。川柳塔社としてどんなキヤッチフレーズがあるか。その点をもっと明確に打ち出してほしいと思います。

鬼遊 川柳を育てることに對して、同人各位があつて川柳塔に隆盛をもたらしうことがきるのだと思います。

司会 長時間どうもありがとうございます。

若本多久志著

「親こころ・子心」  
送料共 二六五円  
「老いの坂」  
送料共 五三〇円

同人吟

# 秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

わが孫にわが血みつけて苦笑する

工藤 甲吉

メンデルの法則ですネ。名句俺に似よ俺に似るなと子を思い。似るなというても、血は争えない、はつきり出るから苦笑する。この時のわが血は、俺に似よの方の血だろうか、似るなの方の血だろうか、苦笑で似るなの方の血だろう。

有るものがあって長生きいたわれ

傍島 静馬

有るものは勿論、動産、不動産の財産である。最近の年寄りの合言葉。眼閉じるまで絶対に渡したらあきまへんで、渡したらしまいや。渡しはんなや、とは淋しいことです

整わぬ心に使う団扇持つ

岩田 美代

あと三句と共に、心理描写の句が並びました。七、八月号とは違う心境です。句境の幅が拡くなったことをお喜び致します。団扇使うても、ゆっくり使う心境と、せかせか使う心境はよほど違います。整わぬ心をまとめようとする団扇使いも亦一心境でしょう。

三日三晩啼いてこの家の猫になり

川崎 秋女

猫嫌いな者にもわかる、愛情です。又こんな情景にも、しばしば出合っています。啼くという字を使われていることに感服致しました。良い川柳ですね。

地味な方買って帰っておこられる

小野 克枝

おこった方は、御主人、母親、姉妹、友達いづれにしても、——自分ももうちよつと派手な方欲しかったけど——。  
「こんな柄、五十になっても着られるやないか」  
「今派手な着んと着るときないで」  
「でも、この頃若い人が地味な着て、年いってから派手な着たはるな」  
こんな会話がきこえて来ます。

袋物祖母の形見はみな手編

土谷 城石

このところ、消費生活とか言うて、機械化されたオートメーション製品に我々は飽き飽きしている。一読して。日向ぼつこの濡れ縁で、涼しい樹影で、丹念に編まれた昔風の型の袋物が目の前に現われてくると同時に、お祖母さんの、やさしい笑顔も偲ばれてくる、温かい句です。

信号のない世の中は楽しかる

吉田 水車

人間は信号を作って、信号に舌打ちして、小手をかざしている。信号のある都会生活から、はなれられない人間のあほらしさ。作者は日本一交通被害の多い名古屋市に住んでいられる。

その他チエックした句  
うちの子も親のとりに合いてくれる

古方

『まけてたまるか』喜劇の題でした  
夏まつり団地は文句多いとこ  
柳志  
値上りになってきちんと並べられ  
千翁  
他人には見せない顔を孫に見せ  
文秋  
大根の値が講演のネタになり  
暁童  
一度しき生きたれぬ世に無為無策  
鬼遊  
増えすぎて平和の鳩は嫌われる  
いわを  
イエスさま日蓮さまほど肥えていず  
一三夫

黒揚羽翅へば忍者という姿

小松園

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

靴揃え愛も情性の日が続き

小出智子

結婚生活の危期はまず三年目ぐらいから周期的に起る。それをよく知りながらどうする事も出来ない焦りと、自省や悩みが、上五の動作によく現れている。

一人来てひとりに出合う花の寺

小谷葉子

おそらく俳句では詠みこなせない境地を、川柳の手法で表現し得たと言える秀句。これだから我々は川柳を捨てられないのではなからうか。

交番へ信号無視の出前来る

大西為二

どこか歪んだ現代の世相を鋭く風刺した句であり、パンチの利いた句とも言えるのではないか。

唇がさびし誤解の解けぬまま

宮西弥生

恋愛中の女性か、若い人妻か、それは論外として、日常生活の中に、しばしば起るこの種、デリケートな女性の感情をうまくまとめた秀句、上八の強さが利いている。

どたん場に来てそれだけの人と知り

船木史朗

詠みふるされた句想にも拘らず、修辭手法の妙がこの句を生かしている。

カニよいかれ ダンプへつめをふりあげる

脇本政己

あらゆる公害の渦中に生きる我々人間も、この儘、三十年先には地球上に存続することが出来ないと言われる。

この公憤を蟹に託しての表現、おみごとと言う外はない。ただ、惜しむらくは「いかれ」を「怒れ」とされれば、文字の感覚からくる強さが、この句を一層印象的にしたであらうと。

山の青すがりつきたい雨上り

有田鹿の子

雨上りの山緑ほどすがすがしいものはない。然し、その思慕の情を「すがりつきたい」と表現しておられる処は、さすが女性作家だと感を深くした。

サン格拉斯かけ道ならぬ人と乗り

荒井良枝

マイカーであれ、オートバイであれ、この自虐性アバンチュールな火遊びにも、チョッピリ人間の片鱗が「サン格拉斯」で強く表現されている。

がめつさを見せず本堂でかしまり

目賀芳月

句のモデルは「悪人正機」の仏説も知らずただかしまって、念仏していることであろうが、ユーモアの中に弥陀の本願が説かれていようである。

下手なりの唄にも坊やねんねする

原田明春

歌を忘れたカナリヤではないが、近頃の若いママは、ほとんど子守唄を知らない。然しこの下手なりの子守唄が、海綿に水が沁みるように暖かく子供の胸に伝ってゆくことである。

紙面の都合で割愛した左記秀句の鑑賞評も出来ていますので希望の方はご通知を。

知らぬ間に幸運が来た太い指

鱈屋で手術の疵が痛み出し

秒針を殺して過疎の村に老け

小瓶一本で吊皮二つ持ち

兄弟で左右から注ぐ喜寿の酒

賢いと云われたくないのも女

橋高薫風著

「れもん」

千共五〇〇円

# 九輪抄

## 清水白柳選

米子市 八木千代  
みごもらぬ業と養女の背をみつむ

大阪市 平井露芳  
働哭を抱えて砂丘音立てず  
くちびるで話す女の鈴のしわ

大阪市 吉岡美房  
ボーフラの湧くだけ水はまだきれい  
透明人間の証拠だテープ声を出し

今治市 月原宵明  
日本が持てばナイフも再軍備  
道草にしては入院厳しすぎ

高根県 榊原秀子  
嗟ちてゆく女利那があるばかり  
胎教へ爽竹桃が赤すぎる

八代市 船木史朗  
他愛ないよろこび白く干し上げて  
風化した土は戦友かもしれず

大阪市 中川滋雀  
コンパスの伸び未来図を派手にする  
人生の谷間に満たすもの求め

大阪市 小谷葉子  
子のきずなたぐれば小さな鈴くれる  
倉敷市 倉敷市

倉敷市 小島末子  
倉敷市 倉敷市

倉敷市 小幡里風  
倉敷市 倉敷市

ライバルに贈る花東だから赤い  
銃口をのぞけば過去がいきている

岡山県 三輪康明  
蜜蜂の蜜にまみれた豪華な死  
生活の為めなら兵器もつくりま

松江市 柳楽鶴丸  
立秋に原爆映画見るつらさ  
自然が笑うオキシダントが歌う

岡山県 直原七面山  
GNPは一面に公害は三面に  
育つ児へマンガ大人の彩で書き

大阪市 神谷凡九郎  
青年の夢 米の値を知ってはず  
公害の掃除を台風やって呉れ

西宮市 丸山孔一  
サヨナラの余韻尾灯を視野に置く  
敏感に急所突いてる不倅せ

小松市 四方天弘美  
富田林市 岩田美代  
大阪府 宮尾あいき

竹原市 三宅不朽  
大阪府 江城修史

大阪府 宮地双楽

大阪府 江田修史

大阪府 岩田美代

大阪府 宮尾あいき

大阪府 宮尾あいき

大阪府 宮尾あいき

大阪府 宮尾あいき

大阪府 宮尾あいき

孤独からやっとのがれた金魚の死

竹原市

時 広 一 路

振り向いてくれぬ背中が厚く見え

島根県

堀 江 芳 子

地球裂けそうな暑さへ対抗す

岡山市

川 端 柳 子

サンダルの客がしあわせ置いて去に

豊中市

戸 田 古 方

坐れるところでは必ず坐るパビリオン

岡山市

山 田 止 水

休耕の余力豊作にしてしまひ

大阪市

木 村 水 洞

セックスが枯れてる夫婦信じ合ひ

岡山市

出 原 敬 一

悔悟して女房一人に身を捧げ

桜井市

岩 本 雀 踊 子

さみしかる母の墓標はひとりぼち

竹原市

森 井 菁 居

釣りひよっこり始め男の曲り角

島根県

堀 江 正 朗

舗装した道はめくらの感にぶらさず

姫路市

村 上 春 巳

結局は悪童ばかりクラス会

熊本県

有 働 芳 仙

半生を賭ける見合いの茶を出させ

藤井寺市

西 井 芳 仙

続けさま二度目のたより不審がり

西 井 芳 仙

手習草紙好きなりへんな孫を持つ

伊丹市

小 川 静 観 堂

巢を張って強さを試す蜘蛛であり

東大阪市

竹 中 肖 二

貧富の差人と生まれたばかりに

下関市

志 賀 木 石

なるようになると悟ってから眠れ

鳥取県

両 川 洋 々

結論が出て真夜中の燭がつく

大田市

藤 田 軒 太 楼

伝統のむごさよ老いてなお舞台

大阪市

阪 上 十 止 庵

菊の苗無駄な助言もそえてやり

愛媛県

渡 辺 曉 童

虫の音楽この草原自由席

和歌山市

秋 月 宏 方

台風のお蔭デートの早しまい

広島県

南 条 露 声

税務署がはじけばソロバン黒字なり

八尾市

高 杉 鬼 遊

カレンダーが英語で困る時計なり

青森市

工 藤 甲 吉

浪人は朝からステテコで在し

青森の「ねぶた」

けんらんと武尊蝦夷を討ち

清 水 白 柳

西の灯も消えて柳界闇深し

八月二十三日 退院

羨望を背に退院の階降りる

大島謙明先生を悼む

冗談で訣れまぎらし退院す

# 名妓連とからゆきさん

## 東野大八

あちらこちらから、暑中御見舞の楽しいお

便りを頂いたことだが、その中に名古屋芸妓株式会社というのがあった。タイとマグロが向き合って、オス、とっている涼しい図柄で、その端っこに「いつべんやってこんかなモ」とペン字がある。私を知るおばあちゃんネエさん（ややこしいね）が、氷金時でも食いながら潰れた小豆のツラを思い出したのかもしれない。さすればそれが専務、社長であるかもネ。

名古屋芸妓株式会社、通称名妓連——この会社が誕生したのは昭和二十六年五月、資本金六百万円、自前の社屋を東新町の電車通りに持ち、社長以下株主一切すべてこれ芸妓のみで構成したあっぱれなる法定組織である。盛栄連、廊連、睦連、千種連、浪越連、中検、辰巳連の七連妓しめて百六十五名が一同となり、一名の社外株も作らず結成されたのだからケチンボ名古屋の、三河、駿河の家庭どころの土地柄はアツとたまげた。必然、マ

スコミがワツと勢い立ったものである。

私がこの妓連を訪れたのはその設立後三年目。知人の某が常務理事に就任したからである。彼は男である。しかも、女護力島での唯一人の男性役員なのである。

「やあ、黒一点——どうしている？」と事務室へ行っていくと、女ばかり七、八人の一角で、さくら貝の中のさざえみたいなむざい顔がアスツとした顔付でアゴをしやくった。応接室へ入り、さしになると、全身からタガを抜いたように彼、フワツと平ったくった。

「八方おいろけのネエさんたちばかり、うまいことしやがったナ、とそねんでるわけだが、どうだい、気分は……」

私その声に、彼は顔前の空気を片手で払い落すや索然と口走った。

「まるでナゴヤぶぐの生贄にいろようだ」彼は大陸から復員した傷痍軍人で、元中尉。傷病恩給が立派に頂けるのに、敗戦国の祖国

からこのようなものは貰うに忍びず、と血書を認め辞退を申出たというサムライである。その直情一途の葉隠武士が、こともあろうに芸妓会社の常務に収るとは……。

「わたしやあ、監査役だけな、何する役でやあも」

というおばちゃん連が重役会議に出る。すると議案どころか、議論百出が世間話となり、随所で花が咲いた挙句お座敷の時間となり、あわてて本日は散会。

「にてもやいても食えんのじやよ、会議が宿酔で出れんのやら、出てもウツラウツラ、なかには迎え酒で酒癖の悪くなったのが、二号議案とはあてつけか、と居直る。」

イヤハヤと、元高射砲小隊長は、当らぬ弾に不発が出たように無然たる表情。

暑中見舞のハガキ一枚にそんなことを思い起しながら、とにかく名古屋へ、出たついでに、くだんのハガキの署名人を訪ねた。

「やあ、久しぶりじやなも」

清川虹子が「まわり肥えて、思いきりシワくちやにしたようなおばあちゃんが現れた。やはり会社といっても名妓連、応接室は青だたみである。長火鉢が欲しいところだがそうはいかず、新建材の角機で、タバコセットはカラフルな切子ガラスだ。」

「十年になるじやるか、X家の女将じやよ。あんたにインタビューして貰うた」とい

う。貫録はどかっ居据ったところからできて、態度物腰、だんだん自民党の前尾繁三郎ダンナに似てきた。

「あんたもしぶうなんざったのう、びん髪雪の如し、半百を越ゆ……かのう」

いうことまで堂々たるもの。

「社のハガキが余って、ついあんたの住所が眼についたけん、どうしとんさるじやろうと思つてな」

ただしこんなことは余計なことである。

「うちの会社も、五年で借入金を完済して下部組織の実務を掌管させるため、名妓連組合を作り、万事うまくいって、黒字がつついとる。芸妓個々の貸出し金や、保険証や、厚生福祉施設もどんどんそろつて、最近では香港やハワイやアメリカ、パリまで視察団を毎年送り出すほど……」

一体なにを視察するのか、とききたかったがやめにする。

「このごろはあんた、若い妓が会議でも発言権が高つて、大アネゴも型なしでの、どんどんバリバリ発言やら行動力が強うなつて今に四十代の社長に三十代の専務がでるじやろうて……」

他愛もないそんな話で、早速こちらはみこしを上げにかかったが、高射砲中尉が気にかかるのできてみたら、

「病氣ちゆうことでとうにやめなはった

が、女二百人に男一人ちゆうと、なんとうやりにくうて、その点のコマカイところは、こちらが気が回るのは得手でのう」

私はその足で、地元の日刊紙の友人を訪ねて、早速に名妓連の話になった。

「いやあ、実に立派な業務内容で、ヘタをすると運営面では中部電力やトヨタ自動車の上を行くかもしれんな」

と大マジメで答えた。名古屋財界の交際費

は年名目で百三十億円とあるから、ゴルフを差引いてもその実勢は比較にならぬ。名古屋証券取引所へいまに名妓連は二部上場するかもしれん、と彼ははじめて笑つたのである。

大陸生活を多年送つた私にすれば、おぼさん前尾繁三郎社長との対面によつて、過去の芸妓観なるものに大きなイメージチェンジを受けたことである。大陸芸妓は、安政六年深川の芸妓小染がハワイに現れたのを第一号に、慶応三年パリの万国博に出演した柳橋の芸妓すみ・かね・さとの三人におよぶ。そして「からゆきさん」の名による大陸娘子軍の哀歎溢れる活躍につながっていく。

大陸の芸妓は、娼妓にもつながっているわけだが、それは日本の大陸経略に正比例して急上昇していった。北はシベリア、南はジャワまで、明治二十八年には、七千人を越えたのである。私がハンガリーを下り、アムールの

河口の同江という一寒村で、一群の日本娼妓と出会つたが、その中に、そのかみ深川の小唄芸妓で鳴らした女もいたことである。

記録によると明治三十三年（一九〇〇）ウラジオストックからの、からゆきさんたちの故国送金額は約三十万円とある。国策会社の日本郵便会社の同年同じウラジオオからの故国送金額はなんと四万五千円弱とある。遠くシベリアの果てに、わが身を切り売りして、人間とも思えぬ搾取に骨身を削りながら、彼女たちは一円、二円の小金をためては、故国の肉親やお国の為の義金にとそれを投じていたのである。明治三十七年三月シンガポール在留邦人から五千五百円ほどの国防献金があつた。それらのすべては女名前前で、いわずと知れた大陸娘子軍である。その中に姓不詳すぎ八十五銭というのがあつたという。千万無量の惨害にみちた一銭ずつの集積であらう。この記録を眼にして私は大きな感動をよびざまされたことである。しかし、彼女らは果してどういう末路を迎えたであらうか、文字通り墓なし、ハカなしの一語に尽きよう。

名妓連株式会社——多情多感な私は、大陸からゆきさんたちの血と涙と汗の捨石を、一つずつ丹念につみ上げていったピラミットの果の金字塔のように思えてならないのであつた。

結構とやいわんである。

古 米

小幡里風選

新米と古米倉庫でにらみ合い 鎮也  
 古々米曰くわが身終戦直後なら 文月  
 策もなく古米へ払う保管料 代仕男  
 托鉢で古米を受けける頭陀袋 誓二  
 過剰米積んで米価は据え置かれ 雅堂  
 年金で細々僕も古米なみ 眺童  
 豊作が古米談議のもととなり 春日  
 古米にも口ひげの虫が這っていた 軒太楼  
 万博の客も古米を食わせられ 洋々  
 大臣も古米くるくるかき廻し 芳子  
 かき餅になった古米のふくれよう 恵子  
 古米だと断り都会の子に持たせ 佳女  
 銀めしと呼ばれた過去もある古米 利美  
 昭和元禄ひずみだらけと古米言う 藤持  
 云うなれば高年増と云う米さ 凡九郎  
 猫の目の国策古米を山と積み 隆子  
 古米研ぐ瑞穂の国の男達 杜月  
 山と積む古米の袋ピエロめく 静歩  
 税金をたっぷり吸うている古米 翁童  
 倉庫から出番待っている古米 眺風  
 豊作の予想古米になる予想 松花  
 豊作と古米の意見折り合わず 一治

古々米へ政府一本釘を打つ 祥月  
 古々米へ一年休めとも言えず 白江  
 古米より緑のほしい乳牛が増え 春海  
 豊作が祝うた筈が古米にし 伶人  
 古米どうなるか今年も精を出し 松花  
 公書の一つに政府も持つ古米 雀踊子  
 古米で結構僕は戦中派 素身郎  
 古米もなじんで母さんキロが増え 文子  
 新米と抱き合わされて古米嫁く どんたく  
 鼠耳打ちあっちの蔵が新米や 古方  
 古米山積みビアフラは飢え 十止庵  
 敏感な舌は古米と知っている 扇水  
 古米になるとも知らぬ稲の出来 勝子  
 炊飯器黙って古米炊き上げる 信二  
 せめてもプライド古々米と云はれたい 凡九郎

佳 米作れ作るな古米もて余し 章雅  
 そっぽ向き乍ら古米積み重ね 千翁  
 インフレを嗤って古米山と積み 福子  
 古米同士台風一過きいている 古方  
 居据った古米が稼ぐ倉庫料 伶人

人 スローモーターのハンコ古米にしよう 十止庵  
 地 水争議たとえ古米になろうとも 宵明  
 天 古米まだ積まれて平和の鐘を聞く 柳子  
 軸

やせ我慢

若林草右選

先輩の顔で古米の独り言  
 高利から手形を落とすやせ我慢 宵明  
 やせ我慢私が払います払います どんたく  
 背を向けて何とか云うてもらいたい 千翁  
 エリート鼻についでるやせ我慢 青夜  
 もう誰もとめてくれないやせ我慢 十止庵  
 三日坊主とられたくないやせ我慢 鶴丸  
 やせ我慢もうプライドに来た限度 眺風  
 明治生れやほととけあれも我慢 古方  
 やせ我慢ため息もらす登山口 藤持  
 やせ我慢するなと腹の虫が鳴き 止水  
 やせ我慢男の方が先に折れ 思月  
 やせ我慢伊達の薄着が風邪をひき 里風  
 やせ我慢左遷の肩をいからして 初甫  
 やせ我慢する老農の米作り 雅堂  
 やせ我慢同士とりなす顔を待ち 代仕男  
 ママの顔見ると泣き出すやせ我慢 洋々  
 やせ我慢だつたと気が付く帰り道 輝親  
 やせ我慢もう限度だと借りに来る 伶人  
 やせ我慢張るなと別な俺の声 国彦  
 やせ我慢ほととけその内気も変ろ 軒太楼

課 題 吟

やせ我慢新築まではよう真似ず 春日  
 やせ我慢するなど淋しいほめ言葉 一治  
 失言を守り通したやせ我慢 不二  
 びしよ濡れになって帰ったやせ我慢 秋月  
 ライバルを意識しているやせ我慢 木魚  
 ムコに来て下戸で通したやせ我慢 正朗  
 やせ我慢顔の汗が知っている 芳子  
 やせ我慢もう看破った刑事部屋 孜孝  
 ライバルがどうでも無理を聞く弱み 芳仙  
 やせ我慢くらべのまなサウナ風呂 智司  
 やせ我慢若さがキツイズボンはく 肖二  
 好きですと素直に言えぬやせ我慢 恵子  
 中古車の方が気楽とやせ我慢 和宏

佳

軸

給料前近所へ妻のやせ我慢 素身郎  
 グリーン車を選ぶ左選のやせ我慢 酔々  
 やせ我慢痛いチップを派手にきり 利美  
 やせ我慢旧カナづかいで押しとどし 白汀  
 やせ我慢ネギが泌みたと言う涙 鎮也

あいつより下は出せない奉加帖 ろ亭  
 地  
 葬式の格まで妻にいいのこし 新之助  
 天  
 あやまれば帰ると里で待ち焦れ 章雅  
 軸

周遊券旅の安売りするごとし 白汀  
 周遊券皆朗かな顔ばかり 雀踊子  
 周遊券もらったてまえ雨に行く 富子  
 周遊券あと一枚は疲れ出し 信二  
 迷うだけ迷うて周遊券にする 初甫  
 周遊券自己紹介のように出し 伶人  
 周遊券台風予報ばかり聞き 福子  
 周遊券お宮の松を信じきり 宵明  
 周遊券お国訛りで押し通し 同  
 周遊券バスの遅れが気にかかり 章雅  
 周遊券ろくに休まず次へ発ち 暁明  
 周遊券おみやげまではうけ合わず 扇水  
 周遊券ケチな予算を見すかさず 七面山  
 周遊券女四人がよくしやべり 止庵  
 親切な改札だった周遊券 暁風  
 周遊券を使えと駅でおしえられ 翁童  
 周遊券みやげは最後の駅で買い 素身郎  
 周遊券どこかで逢った人に逢い 保夫  
 世話好きが周遊券で脚を出し 里風  
 新婚のように連れ立つ周遊券 醉々  
 ノーチップ周遊券の女客 利美

周遊券

吉田水車選

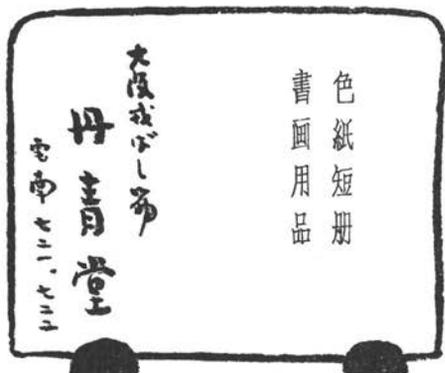
周遊券また乗るかえて乗るかえて 代仕男  
 周遊券チップいるとこいらぬとこ いわを

佳

老妻は家が恋しい周遊券 芳子  
 周遊券酒くせわるいのが一人 里風  
 周遊券こん度は一人で来たいとこ 素身郎  
 周遊券祇園祭りの稚児の列 いわを  
 孝行のまねごと万博周遊券 鶴丸  
 周遊券そこにバイトの汗にじむ 木魚

軸

周遊券秒読みにする忙しさ  
 周遊券車中泊りはあわれなり



# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生度乃先生は苦手の暑さもものかわ、毎日のようにお孫さんの英語指導に大阪万代のお家へ。歳だからぐったり草臥れる日もあるが、と言っているが、一つの目的を持っている生活は、先生をいつまでもお若くしているようである。

▼昭和四十五年度文化祭川柳大会並第五回川柳文化賞贈呈式は十一月三日午前十一時から東京都中央区新富町の印刷会館で開催。兼題、迷う・角(つる)・双児・毒虫・特別課題席題四題当日発表、投句は、投句料百五十円(十五円切手十枚)封入の上十月二十日までに東京都練馬区練馬四の二三の七、三浦太郎丸宛

▼第六回雀郎まつり川柳大会は九月二十七日(日)午前十時から宇都宮市桜四丁目の一の一九くろかみ荘で開

催。▼第六回全九州番傘川柳別府大会(別府番傘四十年記念)は九月二十七日(日)午前九時から別府市のヶ浜ホテル北泉で開催。▼番傘いざよい会三十五周年記念「女性」川柳大会は十月十日(祭)上本町一丁目大阪府婦人会館講堂で開催。兼題、素敵・サロン・焦点・鯛・力、投句は三百円封入の上、大阪市北区天神橋筋一の二七番傘いざよい会宛。

▼番傘九月号は「万国博を見る」を特集。▼第八回三重川柳大会は十一月三日午後十二時半から津市丸之内、県文化会館展示室で開催。雑詠五句、(投句)切手十五円。兼題、読む・本心・反応・女の一生・揃う、(投句)切手二十五円、投句料二百円)、席題二題、兼席題

各題三句、投句は津市丸之内緑町、喜田子葉方第八回三重川柳大会事務局宛。▼第十九回山口県川柳大会は九月二十日(日)午前六時から山口県春日町県自治会館三階大ホールで開催。▼足利市制五十年祭川柳大会は十月二十五日正午から織物会館で開催。兼題、足音・利用・市街・制限・五円・十代・年功・祭日・大胆・会長、各題三句、投句は二百円を同封の上、十月二十五日まで足利市通一丁目二七〇二柿沼月歌宛。▼備前川柳社、川柳後楽社合同吟行会は八月二十二・三日奥津温泉奥津荘へ。▼若本多久志氏(西宮市同人)は八月十二日金沢への墓参を兼ねて富山、高山、下呂温泉へ。その昔大和文化や出雲文化をしるぐ高度な文化をもっていたと言われる飛騨高尾の街は屋並の一つ一つにも深遠な日本人の心の故里を感じさせますと、「飛騨の街深遠無量の味を秘め」

▼中島小石さん(大阪市同人)は八月二十九日戎橋の日立ホールの舞台上花柳流舞踊ゆかた会に出演、「しずのおだまき」を舞われた。

▼大野風柳氏(新津市)は新潟日報の「晴雨計」の木曜日欄を担当執筆されることになり八月六日その第一回「ともだち」が発表された。

▼尼緑之助氏(出雲市同人)は、今秋の第三回島根県芸術文化祭川柳作品審査員に選ばれ、柴田年朗、岩谷香月氏らと応募作品を選衡される。

▼東野大八氏(美濃加茂市)は八月九日大洲の夏の川柳大会に出席、本誌でおなじみの長野文庫、米沢暁明、月原晋明の各氏と会い川柳塔談義のひとつを過ぎられた。

▼小西無鬼氏(兵庫県)執筆の多紀新聞紙上「川柳の三氏が、「ささやま」句会に勇気をふるって初投句をされた。無鬼氏も初投句へのきっかけ、思いの必要なことを強調しておられる。

▼西出一栄さん(大阪市同人)は病氣軽快、退院して自宅で静養を続けておられる。

▼金井文秋氏(大阪市同人)は日頃指導をしておられる小出智子、河野君子両女性

作者が揃って川柳塔賞、準賞を獲得されることになったので喜んでおられる。▼清水一保、森田布堂、(鳥取県同人)両氏は九月五日万博を見物、早目に引き揚げて本社九月例会に出席された。当日は八十三万人入場の記録的な日であって、「いやもう、いやもう大変で……」。と万博の印象を語っておられた。清水一保氏は「いささび川柳会」に久しぶりに出席、なつかしい顔と有意義な半日を湖畔

誠意と技術で  
世界のために



シャープ株式会社

の宿で交歓された。「水鳥の平和見守る嫁ヶ島」  
 ▼西尾葉氏、八木摩太郎氏、岩本雀雄子氏、阿部柳太氏、高杉鬼遊氏、河内天笑氏、藤井一二三氏、吉井奈々さん、小谷葉子さんの皆さんは八月二十三日こまつ柳壇主催の川柳塔同人歓迎句会に出席、九谷燦寛元を訪ねられた。  
 ▼三井静夢さん(香川県同人)から、「今年は私にとって大変運らしく、春から接触事故、病院に泥ぼろ、旅行中の盗難などかんぱしくないことが続き、作句は低迷状態です。」  
 ▼増田次章氏(東京都同人)は東京都三鷹市下連雀四の五、大和証券三鷹第一家族寮三〇二へ転居された。  
 ▼第六回山陰川柳大会が十月十一日午前十時から、鳥取県東伯町の中央公民館で開催。兼題は「花の町」「憩い」「秋の虫」「未定」席題五題は当日発表。会場は山陰線浦安駅下車五分の地点。  
 ▼堺市医師会誌十六号「患者から見た医師」に路郎、生々庵、湧三、無名林、阿茶、栞、摩太郎氏の句が掲載されている。

▼吹田川柳会の有志と弓削川柳社の有志が懇親句会を開き、大坂側から萬紫、紅蓮、静歩氏、弓削則は紫光、七面山、止水、奇童氏はか出席「風ひやり恩師の句碑が笑いかけ」静歩。  
 ▼越智一水氏(愛媛同人)は十月の第十二回全国川柳大会の大会役員と運営など人手不足の中を走りまわっておられる。  
 ▼新潟回天子氏(唐津同人)は十一月に開催される文学展に川柳の短冊等を百点ほど借してはよいと云っておられる。有志の方は本社へお届けください。  
 ▼長谷川三司氏(尼崎市同人)は腰痛で悩み、右の耳上の小さなこぶの切開手術で入院、路郎先生の「六十一」まだ情熱は燃えに燃え「七十の恋でもとガンばって」おられる。  
 ▼本多柳志氏(大坂同人)は九月三日黒部から旅信「PPMゼロの空気を深呼吸」柳志。  
 ▼第十三回近県川柳大会は出席一四〇名、投句七〇名の盛会だった。  
 ▼句集吉備団子第二十一回原稿募集。自選十句(過去一年間の作品) 参加料五百

円、締切十月十日。発行日昭和四十六年十二月六日、原稿送り先、岡山市津島岡大宮、舎H三〇一七、川柳岡山社内、吉備団子編集局。  
 ▼川柳噴煙吟社はさきさき大嶋壽明氏を生んだが、吟社を移転して新生の意気に燃やしている。〒8662熊本市健康町京塚424・七谷虹棧橋方。(十月一日から町名改正で健康町京塚本町53の12となる)  
 ▼青山慶之助氏(大坂市同人)は大坂市天王寺区北河堀町三六へ転居。  
 ▼浜田久米雄氏(岡山県参事)は十月四日の路郎賞受賞式と同人総会に岡山の同人を誘って出席されると。  
 ▼有信新之助氏(大坂市同人)は旅行から帰阪してみると路郎賞の準優秀作第二席の明朗に驚きましたと。  
 ▼野田素身郎氏(倉敷市同人)は中国ブロックのコンシューター研修を岡山で開催中その担当者として、多忙をきわめておられるが、路郎賞準優秀作第一席の知らせをうけ疲れも忘れましたと。  
 ▼小出智子さんと河野君子さん(大坂市)が近所に住む主婦同士で、共に川柳塔

賞の第一位、第二位を獲得し、その重責に今後の責任が心配だと。  
 ▼不二田一三夫氏が九月十四日夜二十日夕まで松江に滞在。玉造温泉長楽園に一泊後は米子の千代・瑞枝さん。出雲の緑之助氏と紫さん。木次の明朗・正朗・清泉・芳子さん。松江の祥月・鶴丸・孤呂二諸氏と会い、い合同の歓迎会場レクガーデンで十七日の一夜を過ごされた。

★十月四日二賞発表句会  
 以和貴荘で開催ノ

所	題	時	所	題	時	所	題	時
ナインバ高架下	直感	十月十五日	南海川柳会	道思	十月十九日	玉造温泉長楽園	おしゃれ	十月十二日
親和クラブ	コンピューター・命	午後六時	松崎町二丁目	思慕、仮面、	(月)	大阪交差点南	被害、私用、	午後六時
			以和貴荘	榎根、夜		一〇〇米	特別宿題	

## 明日のくらしの コンサルタント



上本町店                      アベノ店



アベノ店 621-1231・上本町店 779-1231

# 初歩教室

— 題「雲」 —

## 本田 恵 二 朗

ユーモア、センス研究所長の鹿島紳平さんは「ユーモアとは、内に善意と暖かみがあり、けんそんと上品さをもち、無理なく笑いを誘うもの」と言っておられる。私は、わが意を得たりと思おられる。また或る新聞では、企業でも、猛烈社員より、ユーモアのわかるのんびり社員の方がうけはじめた。センスある笑いを企業は求め、川柳の精神を取り戻そうと述べている。その川柳に、ユーモア味が段々と少なくなつてゆくことを私は嘆く。

そこで今回は、なんとなく楽しい句を、先きに発表して、味読し合うことにする。

ふる里の雲も迎える里帰り  
 (里帰り雲の笑顔に迎えられ)  
 花子

台風の予報しきり雲走る  
 (台風がくるよと黒い雲走る)  
 利美

雲つかむような話で煙に巻き  
 (舌三寸雲をつかませ煙に巻き)  
 文子

夕立をつれて来そうな雲がふえ  
 (夕立を連れてるらしい雲の貌)

月の面をふんわり撫でて雲走る  
 (月の顔撫で撫で走る雲の列)  
 誓二

一片の雲名月を引立てる  
 (名月を引立てるようになぎれ雲)  
 露杖

ちぎれ雲月の引立て役となり  
 雲一つアクセサリーが似合う富士  
 (雲一つアクセサリーが似合う富士)  
 孜孝

雲間からぼつかり富士が顔を見せ  
 (富士の峰雲の襟巻して気取り)  
 三十四

病み上り鯛雲まで食べたがり  
 (鯛雲までも食べたい病み上り)  
 濁水

雲の上で雷さんが大あばれ  
 (かみなりの運動会らしい黒い雲)  
 秀村

雲の上高く遠く雲雀さん  
 (浮雲と遊ぶ雲雀に歌があり)  
 志津

雲行きを見ておねだりの加減をし  
 (雲行きを見ておねだりの手をかえる)  
 シゲ

入道雲おふとん干にあわてさせ  
 (雷雲が干した布団をねらつてる)  
 繁子

雲間より月が覗いてこんばんわ  
 (雲間から月が覗き見する行雲)  
 露芳

食指動かつて食べていたい鯛雲  
 (空き腹へ雲が鯛に見えたい鯛雲)  
 まさひろ

雲行き怪しい会議時間待ち  
 (ちぎれ雲みたいな会議間が抜ける)  
 藤持

夏の空入道雲が巾きかせ  
 (入道雲王者気取りで構えたり)  
 茶々坊

以上の通り楽しそうな句に焼き直してみたが  
 そのコツは、擬人法を活用することだ。

雲の無い日は物足らぬ病める窓  
 (病窓へ雲の来ぬ日の味気なき)  
 杜月

闇雲のえもいわれぬ名演技  
 (えもいえぬ演技を見せて入道雲)  
 頼次

雲高くみつめ孤独な瞳ではなし  
 (雲はるかみつめ希望に輝く目)  
 千代

遭難の現場は厚い雲がたれ  
 (遭難の崖にたゆとう雲かなし)  
 洋敏

雲海を縫うてゼット機速さかり  
 (秋空を縫袋切りにして飛行雲)  
 金三

決心を促すように雲蔽し  
 (決心をしるときびしい雲の貌)  
 春海

夕映の真赤な雲にはしゃぐ子ら  
 (茜雲子らに歌あり飛んで跳ね)  
 富士

雲の行方じつと見ている山の旅  
 (山の旅行方の雲がたじろがせ)  
 茂美

あの雲のあたりベトコンなま臭し  
 (あの雲のあたりベトコンの陣地)  
 静観堂

心眼を開けば雲もかき消され  
 (心眼を開けば夜明けの雲きらい)  
 双楽

行く雲をうつし湖底に村眠る  
 (流れ雲うつし湖底に眠る里)  
 信二

旅先きの天気は雲で教えられ  
 (あすの空教えてくれた旅の雲)  
 新之助

煙突が雲にそびえて町繁盛  
 (雲を衝く煙突が繁栄引き受ける)  
 富子

白雲が浮いて青空が湧え  
 (白雲が浮いて青空なお青し)  
 仲美

山峡の杉の木立に雲の湧く  
 (山峡の古杉の木立雲を吐く)  
 綾女

雲が行く影が見えてる野の広さ  
 (雲の影か足で行く野の広さ)  
 止水

鯛雲出だして漁場は活気づき  
 (鯛雲出だして漁場は活気づき)  
 賛平

(歸雲たなびき漁場廻り)

野に伏して雲が故郷の家に似る

(夏雲の一つが故郷の家に似る)

雲すこしあって月見に風情あり

(雲一つ二つ月見に風情添え)

あかね雲今日一日の労がすみ

(あかね雲悔いなき今日の汗を拭く)

老漁夫は雲の乱れをびたり当て

(老漁夫は雲のこころを知っている)

為二

満津子

弘生

軒太楼

失意の日心なぐさむちぎれ雲

(ちぎれ雲に或る日の失意いたわられ)

走る雲眺め夕立待つ暑さ

(西雲一と雨欲しいうちわ風)

満月が雲の切れ目に顔を出し

雲という文字を使用しないで、雲と判る表現

を考えて見ることも大切な勉強である。

原句は、ただの説明に過ぎない。つまり句

材である。如何にして、これを句に仕上げる

比呂路

多幸

隼人

### 雅号ぶっちゃげばなし (77)

せんおう



水粉千翁

「千翁なんて怪しからんツ」と句  
会でよく叱られたものです。齡に似  
合わぬ一見若そうに見えたためである。若いといわれて  
別に自惚れる訳ではないが、兎に角二十才ぐらいからこ  
う決めていた。下手な絵を描いて落款を捺し悦に入っていた  
頃が懐しい。俳句歴二年は「気取って面白くない」で止め  
たが川柳はもう八年半になる。まだ駆け出しの域を脱しな  
い。しかし千翁とはすばらしい号である。実はこの頃自惚  
れている。千翁の名において巧拙を乗り越えて川柳と勝負  
したいと念願しています。  
長つづきたじゃアないか一目惚れ

山陽技術振興会事務局勤務

(川柳年齢永遠の四十九歳)

### 川柳塔社常任理事会

九月四日六時から理事会開催。二賞の選考  
委員(春巢・白柳・水客氏欠席)が緊張した  
顔で続々出席。

結果は発表のように決定したが、例年とち  
がって一句一句を各委員が意見をのべ、同席  
の理事まで発言するという民主的なものだっ  
た。  
句としては秀作ではあるが、二賞というワ

かと考えあぐねるところに、川柳人の楽しみ  
が集約されるのだ。  
(満月がにっこり切れ目から媚びる)

題一去一十月二十日締切(十二月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二七一

本 田 恵 二 朗

磨かれた伝統の味



柳葉子司  
鶴屋八幡

本 店・大 阪 市 東 区 今 橋 5 ・ 電 話 (203) 7281  
東 京 店・東 京 都 千 代 田 区 麹 町 2 ・ 電 話 (261) 3996  
売 店・各 百 貨 店 の れ ん 街

クには内容的にややムリと思われる作品は賞  
外におかれた。  
同人総会、文化祭川柳大会など協議した。  
出席一生活々庵、古方、多久志、栞、好郎、文  
秋、薫風、一三夫諸氏。

大萬川柳

「立 場」

入選発表

選者 清水白柳  
投句総数 四百八十六句  
入選 五十七句

弊 草 春 仲裁の立場ホルモン焼へ連れ  
 弊 宝塚ゆきを 倉吉弘朗  
 専門の立場か知らんが理窟めき 大 阪 美 房  
 内縁の立場で写真だけまつり 一 二 三 顔立ててほしい立場の裏話 大 阪 濁 水  
 下 関 木 石 長男が親の立場で意見する  
 美人秘書時にはあらぬ目で見られ 米 子 千 代 異議ありと立場の違う声を出し 大 阪 為 二  
 遠くからそつとお訣れする立場 篠 山 可 住 大臣も個人としてのものを云い 大 阪 三 十 四  
 気象台の立場しんしゃくしない雨 富 田 林 花 梢 ポーナスも出す立場では多すぎる 大 田 軒 太 楼  
 気苦勞な立場で笑顔忘れない 島 根 芳 子 誤解とは云えぬ立場に迫り込まれ 富 田 林 美 代  
 嫁という立場耳打ち気にもなり 和 歌 山 葵 水 考えるほどピエロになつても立場 鳥 取 洋 々  
 悪友としての立場で買つて出る 弁解がすぎて立場が悪くなり 倉 敷 十 四 雄 母さんの立場を娘わかりかけ 倉 敷 里 風  
 倉 敷 十 四 雄 自滅した立場をエンマさま囃う

大 阪 庸 佑 立场上叱つてはると聞いておく  
 大 阪 新 之 助 来られては困るが誘いに寄る立場  
 弊 素 郎 妻が出てボクの立場が宙に浮き  
 追う立場からもいつしか遠ざかり  
 八 尾 鬼 遊 肩書の髭をはやして笑わない  
 親友へ医者者の立場で意見する 倉 敷 三 林 坊  
 焼香の順に立場のない女  
 その立場になればと腕を組んだ  
 弊 天 笑 耳打ちで妻の立場を教えられ  
 対等の立場にかえる辞表出す 大 阪 慶 之 助  
 君の立場もきこだしとそれつ切り  
 責任はパパ実権はママ握り 倉 敷 恵 二 朗  
 立場が違うからあんなにも笑え  
 立场上張る煙幕の色を選び 大 洲 暁 明  
 消費者へ言い分もある売る立場  
 医師としてこれから先は云えぬ嘘  
 お立場もきましようがときらめず 大 阪 弘 生  
 本妻に直れば二号も世帯じみ  
 陳情にイエスばかりも云うとれず  
 夫には慈母だがわたしには姑 弊 青 香  
 ハッキリと云ふ立場をはがゆがり  
 その気ならやも立場に居てやらす  
 遠慮ない放言もして無官の身 高 石 好 郎  
 実印を持たぬ養子を意識する  
 女三十妻母嫁と忙しく  
 奥さんの立場わかれと今日も逢い  
 無理だとは知つて課長以下叱り  
 落ち目からでしやばる妻へ逆わず 佳 句  
 弊 一 二 三 第三者の立場で好きなことを云い  
 羽曳野 幽 玄 どう話ついても金を出す立場 大 阪 水 客  
 滝の音立場を交えるゆとり出る 富 田 林 美 代  
 知らぬふりしとく立場を凝視され 倉 敷 扇 水  
 先輩の立場でそれとなくかばい 入 ノ 句  
 和 歌 山 葵 水 弁解をすれば崩れてくる立場 地 ノ 句  
 米 子 千 代 ふと気付く立場濁つた語尾となり 天 ノ 句  
 大 阪 水 客 看護婦の立場で言葉しまい込み 選 者 吟  
 病人の立場で救急車に揺られ

昭和四十五年度

ベストテン (九月現在)

一	水客	三三、五大阪	一〇	鬼遊
二	素郎	二〇、〇堺	一一	史好
三	千代	一九、五米子	一二	扇水
四	天笑	一九、五堺	一三	素身郎
五	好郎	一八、〇高石	一四	新之助
六	三林坊	一五、〇倉敷	一五	芳二朗
七	吸江	一四、五藤井寺	一六	静馬
八	可住	一四、〇篠山	一七	柳志
			一八	

一九	花梢	三三、〇八尾	二〇	眺明
		二二、〇松原	二一	鱗魚
		二二、五倉敷	二二	美房
		二二、五倉敷	二三	一二三
		二一、〇大阪	二四	利美
		二一、〇倉敷	二五	千翁
		二一、〇島根	二六	慶之助
		二一、〇高槻	二七	美代
		二〇、五大阪		

一〇、五	富田林	昭和四十五年度 第十一回
一〇、五	大洲	「曲線」 五句以内
九、五	岐阜	締切 十月二十日
九、五	大阪	第十二回 (最終回)
九、五	堺	「急所」 五句以内
九、〇	尼崎	締切 十一月二十日
九、〇	倉敷	投句先 大阪府高石市高師浜三丁
九、〇	大阪	目五一六
八、五	富田林	郵便番号 五九二
以上		川村好郎

# 電 照 菊

## 阿 万 万 的

最近の花屋さんへ行つて見ると菊の花など年がら年中目につくようになった。

この菊の花のほとんどが電照栽培である。電照栽培とは、即ち菊の光週性を利用した方法で、菊は春や夏に咲く花と違つて日照時間が十三時間より短かくなると花芽が出来ないと云う性質を持った短日性植物である。

そこで考えついたのが温室の中で一定時間光りに当てるとあとには黒幕を張つたり、電灯をつけたりなどして時間を調節して日照時間ならぬ電照時間を加減するのである。そして街に花を見かけない十二月から三月頃に売り

出せるようにすれば一儲け出来ると云うのであるが……。

しかし、これなど最近の科学の思いつきのようだが、実は昔から鶯などをお正月に啼かせるために灯入れとか申して、布や灯りで昼夜の長さを調節していた事実があることを思ふと昔の人も万更でもなさそう……ですね。

だまされて啼く鶯の声を賞め

# タ イ

近年はお魚の養殖はお盛んである。

マス、ハマチ等は皆さんご存知のとおりであるが、味覚の王様タイとなると仲々困難なようである。

元々高価な高級魚であるから採算の方は間違いないとして手がけて見るのだが長い間失

敗を重ねていた。しかし昭和三十七年観音崎自然博物館で孵化から十五cm程度まで育て上げたそうなので、その後各所から朗報は届いてくるそうだが……。何しろタイと云う奴、すこぶる成長が遅いので商売とまでは行かない。そこで考えついたので味がよいマダイと成長の速いクロダイの混血で、最近ある大学ではその交配に成功したとか……。

この方はレオポーンやライガー等と違つて我々の食膳を賑わして呉れる、だから有難いのだが、何れにしても混血がもてはやされるのは、ひとり流行歌手ばかりではなさそうです。

混血のマスクで歌う人気歌手

投句用に通信に

## 川 柳 塔 柳 箋

一冊 六五円

送料三五円

# 本社 九月旬会 (川柳会)

会場 以和貴荘  
五日 午後六時

ことしの夏はしつこい。万博は終幕近くな  
って毎日八十万人が押し寄せ、大阪が狂気じ  
みてきた感がある。きょうも何人かの川柳人  
が万博へ行ってゐるらしい。

白柳氏が病後というのに、物故川柳人追悼  
のため出席、川柳塔いらいの物故人をいち  
ちよみあげ、その人たちのエピソードを随所  
に入れての柳話である。

他柳社の名もみえた。そんな中で梅志さん  
や緑雨さん、それに前月死なれた大吉さんの  
句会姿が目につく。謹悼。

☆

万博見物の帰途、鳥取の清水一保氏や森田  
布堂氏(第二回路郎賞受賞者)が出席され、  
スグその場で心が通じあうのも川柳人ならで  
はの親しさである。

九月旬会の月間賞は和歌山の垂井葵水氏が  
獲得された。(F)

―河井庸佑整理

出席―与呂志・文秋・古方・新之助・双楽  
・圭井堂・静馬・一舟・葛城・滋雀・摩太郎  
・生々庵・花梢・美房・凡九郎・千万子・庸  
佑・薰風・一三夫・言也・儀一・一保・布堂  
・肖二・静歩・誓二・野迷路・天笑・白柳・  
栗・一二三・鶴声・トメ子・維久子・茂美・  
綾女・奈々・凡吉・多久志・勝晴・宣介・柳  
太・万的・つき子・酔々・一治・鶴翠・葵水  
・千寿子・形水・史好・鬼遊・河産・金三・  
筑前・季賛・葉子。

## 席題「灯り」

福浦 勝晴選

遠い日の灯りは母の愛に似て 一三夫  
消灯のベッドで我をとり戻し つき子  
不夜城の灯へ上るピャガーデン 金三  
灯を消して月をわが家のものにする 静馬  
仏壇の灯りに妻も老いしよな 宣介  
あんな高い山に一軒だけ灯り 肖二  
定連へ店の灯りをまたつける 柳太  
防犯灯の下で口紅確める 葵水  
峠から灯りが見えてホットする 肖二  
安産の知らせ家中の灯りつけ 一舟  
赤い灯がとる格子に鍵がない 筑前  
灯台の灯をはね返えず波頭 言也  
恋人のムードになって来る灯り 美房  
公害の街に夜の灯うるむなり 布堂  
アベツクの歩巾のんびり星明り 儀一  
それぞれの願いにゆらぐ法善寺 奈々

灯り消してやすらぎに入る今日の幸 生々庵  
病室は寝息に更けてゆく灯り 生々庵  
事務的にお灯りあげて嫁という 栗  
長尻へ灯りを一つ消して見る 千万子  
仏前の灯りへ悔ゆる事多き 多久志  
団らんの灯が犬小屋へ暖かし 滋雀  
燈明もスイッチで灯くやるせなさ 多久志  
満月へ灯りを消して妻を呼び 一舟  
精霊の灯りも汚染の水に浮く 新之助  
工場の灯りも消えた資金繰り 河産  
石段を浮彫りにして常夜燈 文秋  
ライターの灯りで表札見て歩く 一三夫  
帳尻へまだスタンドをつけたまま 白柳  
虫の音がきれい灯りを消して待ち 一保  
どの部屋も明るく灯いたまお留守 言也  
灯り消してからも続ける子守唄 生々庵  
垣根からアミ戸を越えてくる灯り 白柳  
かき舟の灯りチラホラ酔うている 静歩  
二号邸にいまごろついてゐる灯り 勝晴

## 席題「経験」

清水 一保選

経験を買われて葬儀委員長 葵水  
経験が物を言います台所 綾女  
人不足経験などと言うとれず 双楽  
経験がない者同士で馬が合い 葛城  
経験で果報寝て待つ主義になり 醉々  
何でも経験成功の経験だけがない 凡九郎  
経験談ぐらいへ女妬きはじめ 天笑

経験が先走って愚問愚答する  
 経験があるから昼寝させてくれ  
 経験と勘で大学出を使い  
 カド番に立って経験に妥協する  
 経験は問わずと急ぐ求人欄  
 視聴臭味触経験たつたそれだけ  
 経験があるばかりに出世せず  
 失敗つづきから語る壇にたち  
 経験があるから初給が折れ合わず  
 経験を語る見舞に励まされ  
 うまいこと言うてと経験乗ってこぜ  
 経験がやとと保っている机  
 いさかの経験飲んで打つ太鼓  
 実績を買われライバルへ引抜かれ  
 経験とカンとで歩く白い杖  
 キャリアは一枚上とカブト脱ぎ  
 経験者語るところにソツがなく  
 経験がもの言う三味で楽屋に居  
 経験を買われ分産整理委員長  
 小さいけれど貴い経験だとわかり  
 経験者は語ると話の落ちをつけ  
 経験へチヨピリスルの有る話  
 顔出とだけでキャリアはギヤラに  
 経験を惜まされ年令で断られ  
 一二回すべて予備校一ぶくし  
 経験が数字にされるコンピュータ  
 経験の差ほど月給差がつかず  
 へんな経験徹にいら細にいら

葵水 筑前 滋雀 河産 誓二 古方 新久之助 多志 柳太 美房 万的 奈々 トメ子 誓二 双楽 摩天郎 静馬 古方 菜 鶴声 花梢 静馬 一治 醉々 醉々 多志

経験があり過ぎ交通違反する  
 自由化の波経験で押し切れず  
 経験がまだまだ若さにも勝てる  
 アイデアに経験の腕押しやられ  
 「俺ならこう」つい経験を口に出し  
 アイデアにキャリアは首を振った  
 経験をつんでつんでは人生生きる  
 予報より古老が当てるに天気  
 三度目で見合が予感の通りなり  
 経験はないが熱心さをかわれ  
 経験を生かし二度目の職に就き  
 七転びした経験なのに倒産し  
 目かくしをして安木節の銭太鼓  
 失恋をしてから女強く生き  
 長い経験長い努力そこにいる夫婦  
 経験がなまじ出世の邪魔をする  
 経験を積ませ引き抜きされちまい  
 経験を生かせとハッパかけられる  
 ムダめしは食ってなかつた老刑事  
 経験を未来へ生かすエンジニア  
 止まり木で恋の経験語り合い  
 経験を積みあげ教養巾ができ  
 経験は尊し老工のきびしき眼  
 経験はだまって友に金を貸し  
 経験を語る古老の眼をみつめ  
 経験を買われて老医遊ばせ  
 経験を積ませた上でカッを入れ  
 妊婦今経験談をきく瞳

千寿子 一舟 文秋 文秋 鶴翠 花梢 与呂志 与呂志 圭井堂 生々庵 庸佑 鶴声 一三夫 布堂 肖二 与呂志 勝晴 儀一 一三夫 白柳 河産 双楽 宣介 つき子 肖二 一舟 凡吉 菜

経験が無駄でなかつた回り道  
 みがはいる経験談は服を脱ぎ  
 経験の老医ニッコリ笑うだけ  
 経験へ一枚加わる太っ腹

一舟 万的 摩天郎 一保

席題「半分」 橋本 言也選

半分は妻にも責のある遊び  
 半分はどうやら見たと万国博  
 ベターハーフという老妻も羨びゆき  
 人生の半分峠も無事に越え  
 半分は里へおんぶをさす新居  
 半分を妻の内助にして平和  
 瘦せたくて半分残す女たり  
 半分は過労といわれ自戒する  
 賛成はしたが半分寄らぬ寄付  
 妻のよりよき半分が今分り  
 半分は遊ぶつもりで馬で勝ち  
 半分は切ったケーキを見比べる  
 半分を明日に売り切れましたピラ  
 なれぞめは興味半分だった恋  
 残品一掃半分も売れとらず  
 半分は飲む相談で山ごもり  
 折半をする筈の利が赤ででる  
 半分も食わない皿を下げに来る  
 半分を遠慮する父がいて平和  
 閉会の辞に半分は腰が浮き  
 半分は死んでまっしやる同期生  
 順待っている半分の長いこと

一舟 儀一 維久子 滋雀 花梢 千万子 万的 新之助 筑前 静馬 文秋 摩天郎 古方

半分に分けてもにらむ食いしんほう 一舟  
意地半分のこして損に妥協する 鶴翠  
半分にききつて間借り人を置き 鶴声  
人生の重荷半分ずつ背負い 一三夫  
こんたんがあつて半分しか食はず つき子  
シャッターを半分あけて休まれず 鬼遊  
話半分にして合樋うっておき 栗  
半分はママが喋った電話料 静馬  
仲よしへ半分惜し気なく分ける 言也

兼題「川」

金井 文秋選

釣糸を垂れる川あり帰省の子 芳子  
友禪をさらしてかも川水濁る あいき  
発展は川を汚してからあわて 正朗  
繁栄のひずみを川に押し流し 滋雀  
生活の裏を激んで夜の川 陽雀  
ゴミ捨てる川に昔の唄がない 天笑  
エコノミックアニマルが棲む川の色 天笑  
恋心流した川へ泣きにくる 茂美  
花火師が今宵川原に見せる腕 守夫  
淀川を渡って旅の恋を捨て 酔々  
梅雨のうちは川の姿にたちもどり 新之助  
子等楽しげに溪流の蟹を追う 儀一  
川底に巷あるようにネオン浮く 虎城  
長良川養殖鮎でする鵜飼 静馬  
蛭まだ故郷の川を信じ生き 一保  
石一つ蹴って失意をいやす川 鶴翠  
洗濯の足を見ている川の宿 柳太

兼題「過去」

八木摩太郎選

川風に吹かれ人間取りもどし 静歩  
目測で飛べた小川に足が落ち 誓二  
逝く母へ三途の川も浅かれと 葛城  
鮎若し川の流れに反抗し 一保  
こんな川へ流していらぬと仏さま ふみよ  
川ざらえ刑事が風邪をひいただけ 圭井堂  
赤い灯の脇役として川が生き 天笑

過去は過去今しあわせに生きる日々 祥月  
過去は過去と割切っているけれど 鶴丸  
過去抱いて夫にすまぬ日が続き 芳子  
語るうち過去だんだんとドラマめき 正朗  
忘れてた過去就職のじやまになり 翁童  
愛憎の過去も夫婦の語り草 花梢  
死ぬほどに君が好きだと過去のこと 布堂  
過去帳をくれば先祖代々御長命 栗  
ひたむきな若さは過去のものと成り 奈々  
過去だけが言うまい妻がおもっている 筑前  
たそがれは言うまい妻となる夜を作る 酔々  
自叙伝の過去は屋台の Copp 酒 静歩  
人生譜染め直したい過去の色 奈々  
過去も知る二度目の妻と添うえにし 茂美  
私の過去をなせ聞くのどうする気 儀一  
過去水に流すお方にほだされる 文秋  
いつまでも過去にこだわる金亡者 白柳  
忘れたい過去をドラマで見せられる 花梢  
過去をもつふたりを仲人まとめあげ 一二三

兼題「柳」

阿万 万的選

水都祭十年前は恋があり 鬼遊  
ナツメロへ酔っぱい過去がよみがも 天笑  
過去の恋小出しに出して売る作家 河産  
立直る夫へ過去を包む妻 千万子  
その過去にふれず雇った太っ腹 一三夫  
思い出に悪夢の過去がつきまとい 庸佑  
年寄の昔話も聞いてやり 誓二  
指練ればこの七年の浮き沈み 誓二  
過去触れず信じ合うての共稼ぎ 一治  
アリバイが過去の恋から崩れ出し 河産  
かれないなる過去が脳裏を離れない つき子  
過去帳に衛門も兵衛もある我が家 葛城  
触れるまい時流に乗った人の過去 圭井堂  
恋愛をしたと思えぬ父の過去 一治  
かつぎ屋の過去知る友をけむたがり 静馬  
もう過去の人とは見えぬ舞台裏 一保  
万博も見せてやりたし過去の母 葛城  
清貧の過去が恋しい不倅せ 生々庵  
過去問えば女はくちびる嘴んだけ 一三夫  
老婆は死ぬ迄過去にしてくれず 一舟  
過去秘めて男おとこの道あゆむ 摩天郎

倅せな柳銀座の辻を分け 扇水  
猫柳萌えてせせらぎ春の音 あいき  
炎天に柳疲れた影を投げ 祥月  
土壇場は柳に風と時間切れ 藤持  
猫柳咲き釣竿の手入する 鶴丸

シャッターへ柳の下に立つ湖畔 芳子  
鉛吹く風に赤旗振る柳 正朗  
ケセラセラ柳に柳の風が吹き 静歩  
原爆に堪えた芽を出す柳かな 金三  
ことぶきの袋もうれし柳箸 陽一  
一本の柳が古りて句碑も古り 肖二  
水郷の柳詩人の恋を知り 醉々  
どじょうからカドミユムまで柳知り 鶴翠  
歩行者天国銀座柳もほっとする 天笑  
添え描の柳は風に吹かれてた 古方  
柳並樹不快指数にゆれて耐え 生々庵  
柳まで首垂れているアスファルト 新之助  
泥はねを避ければ柳に撫でられる 新之助  
大清掃柳行李も捨ててある 章雅  
お化け小屋柳に青の豆電気 トメ子  
遠い春待ちわび生ける猫柳 一舟  
しとやかな柳にも春地味な花 儀一  
アベックが去りアベックが来る柳 酔々  
柳腰虚栄の流儀にて歩き 一治  
幽霊へ造花の柳明るすぎ 鬼遊  
手が届く柳になってまた切られ 柳太  
たたりの噂古木の柳切り残し 多久志  
幽霊が柳のかげで待つ出番 一三夫  
中立のように柳は風に停ち 柳太  
待ちぼうけ柳に風のない暑さ 滋雀  
夢に描く少女柳で待っている 静馬  
風と話し風と遊んでやなぎ寂 凡九郎  
井戸端に柳舞台は春の裏長屋 誓二

自動車の起こす風にも柳揺れ 綾女  
スモッグのなかつた柳へ八十の詩 一三夫  
広重の柳は斜に雨を画き 滋雀  
柳並木風の心に逆らわず 文秋  
美人が死んだ伝説柳の木を囲こい 万的

兼題「遺品」 若本多久志選

遺品だけ先に帰った山の事故 どんたく  
売れもせぬ遺品と借金だけ残し 章雅  
遺品となる草履そろえて旅終わる 筑前  
千人針縫うた遺品の母も死に 摩天郎  
路上の遺品白墨に見守られ 新之助  
愛玩のパイプへありし日の笑顔 滋雀  
雪山の遺品はさびたまま届き 万的  
片方の靴でも遺品届けられ 一舟  
税務署のリストに載っていた遺品 扇水  
散乱の遺品が語る事故現場 翁童  
形見わけ母の匂いを貰って来 好子  
うつり香の残る遺品に母偲ぶ つき子  
遭難の現場ピッケルだけさびし 鬼遊  
寄せ書きの日の丸敵から届けられ 静馬  
恩讐を越えて帰って来た遺品 酔々  
生前に遺品分けする思いやり 静馬  
山の土付けた遺品の靴が着き 一三夫  
遺品もう質屋へいったりきたりする 花梢  
遺品みなあつさり捨ててまた嬉し 天笑  
いっそ何もなかつたらと思ふ遺品 凡九郎  
遺品分け済ました後にある空虚 綾女

パチンコ玉が事故死のカバンから  
御先祖の遺品に家風支えられ  
書きかけの原稿もある遺墨展  
忘れものに忘れものに遺品届けられ  
好事家の遺品に家族チト困り  
遺品分け二号の子だけ隅にいる  
遺品に添えて借用書も返される  
母の遺品缺の鈴が今も鳴る  
帯止めに直して遺品生きている  
友の計に返えしそびれた句集撫で  
貞操と遺品守って二十年 多久志

勝 晴  
一 舟  
言 也  
生 々 庵  
一 三 夫  
生 々 庵  
野 迷 路  
葵 水  
葵 水  
多 久 志

旅行・宴会・リクリエーションの  
ことならどんなことでもご相談くだ  
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

**イチビシ**トラベルサービス

本 社 東京都大田区蒲田4-40-5  
TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18  
三洋電機株式会社食堂内  
TEL 06 (991) 1181 内線 588



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

こまつ川柳塔同人歓迎句会 山上千太郎報

銀行のネオン楷書で聳え立つ 弘子  
銀行の身勝手裏門も開けてくれ 一二三  
身辺に聞くと辞表を出し渋り 柳太  
身辺を飾る余裕が出て五十路 栗  
雑文の中の自分でない自分 茶 仏  
故里は山盛りという香の物 栗  
辛子漬かめばツーンと鼻に抜け 吉 枝  
嫁つがせて花器干からびる日が続き 弘 美  
水着脱げば王者と見えぬあどけなき 奈 々  
水着の線むすめが女になっていた 千 太郎  
ふり向けばふりむかわれていた水着 雀 踊子  
俗物の一人へ歩調狂わされ つき子  
俗物のそしりをはばむ門構え たつ路  
俗物が上座にすわりよく笑い まどか  
銀行も調べて見合いすると決め 天 笑  
銀行のお茶哀歎もなくよばれ 沐 人  
銀行のサビス貯金箱をくれ 富 美子  
シャッターで固めた銀行おそわれ 城 南  
落選の身辺一人減り二人減り 摩 天郎

身辺の整理まだまだ古い寄せず 正柳子  
身辺の雑務を足して旅に出る 味 平  
子の母になって漬物らしくなり 芳 朗  
新世帯里の漬物で間に合わせ 魯 木  
漬物をカラーに仕上げ嫁若し 香 径  
漬物の石まで買って母を待ち 一 進  
水盤にメダカが泳ぐ夏休み 瓢 月  
掘り出した水と花が泳ぐだけ 通 雅  
器ほど花はまると活けられず なほ江  
ポデービル合わぬ水着に肩がこり 信 子  
年甲斐もない人水着の腹を出し 葉 子  
泳げない女もヘソの出る水着 芳 朗  
太陽とデート水着濡れていず 松 水  
俗物で母子同じ屋根に住め 鬼 遊  
俗物にかえり田舎のよさに触れ 水 子  
風吹けば雑草並にうろたえる 松 水  
俗物と云われながらに市議三期 革 刃  
艱難に俗物ゆえに耐えたらし 駿 一

南大阪川柳会

金井文秋報

手加減をされているとは弟子知らず 儀 一  
悪夢だと思えば人生まだ長い 滋 雀  
手加減を許さぬ児の意地頼もしく 君 子  
手加減をしたなと勝って怒り出し 柳 宏子  
断ち切ら思慕イニシャルを砂に書く 智 子  
悪夢とはうれし心気一転させてくれ 凡 九郎  
平凡でよし悪夢のない暮し 静 歩  
働けば損やと思う部下揃い 一 舟  
口実がないので肩を張って出る 新之助  
農協の旅ネクタイへひまがிரい 富 久一  
夜なきうどんの箸口実を考える 柳 太  
幸せはこんなもので揃うていて 古 方

玉造川柳会

西出一栄報

穴うめの記事イニシャルですましき 文 秋  
口実を忘れ本音が出てしまいい 酔 々  
善人の口実息を入れながら 花 梢  
手加減をする術もない点を取り 綾 女  
口揃えママも悪いと子の意見 あいき  
口実に過ぎぬと叱言手厳しい 誓 二  
金貨へ手加減加えたる綴方 肖 三  
朝帰り口実のことに欲が出る 金 二  
五指揃い男女のことに欲が出る 喜 風  
口実はほんとの事も一寸まぜ 好 一  
イニシャルで通じる仲の二人です 鶴 声  
日記焼き捨てて微笑む娘へ安堵 千 代  
悪夢から醒めて郷土の良さわかり 静 馬  
口実も敷居が高い御前様 章 雅  
一徹な男口実など聞かず 庸 佑  
辻褄のあわぬ悪夢へ安堵する 朋 子  
ネクタイも荷縄になって役終る 朋 子  
みつる 朋 子

重複の祝も嬉し古稀の顔 金三  
 炎熱の街角署名の声も酒れ 柳宏子  
 鋭角に夏の女の背が細い 照一  
 角とれて男五十の円熟期 誓二  
 地下道を急いで変な角に出る 肖二  
 好きなくせ角つき合っている二人 頂留子  
 二DK角も生かした主婦の知恵 綾女  
 這い上る中途でこわさしみる底 千代  
 腹の底さと底辺そんな眼が光り 葵水  
 人生の底辺に生きてつつがなし 鶴声  
 遠来の友へどん底見せぬ酒 富久一  
 底抜けに晴れる連休明けの空 虎城  
 底辺に住めども妻と云う味方 一舟

備前川柳社 目賀芳月報

手に汗をにぎる所でコマージュル 正州  
 早熟な生徒に教師汗をふき 芳明  
 油汗やつと祝辞を読み終り 草二  
 汗一つかかず借金取りをまき 清春  
 汗水を流して貯めて子が使い 一声  
 大法螺をふいたついでに汗をふき 三与子  
 花嫁の汗が気になる借衣裳 伊久野  
 先輩の汗をようやく守りぬき 鮫虎狼  
 汗ばんだ乳房の工はかどらぬ 哲郎  
 汗まみれ日曜大工はかどらぬ 照郎  
 冷汗をかく良心をみとめられ 鈴ノ坊  
 百姓の汗は米俵にふくまれず 芳月  
 働ける汗をベッドにうらやまれ 秋月  
 汗ふいてまでもおしやべりまだ続け 浄美  
 汗知らぬ手の札束がみな汚れ 胡風  
 冷汗をかいて大身が縮こまり 明良  
 千鳥足肩組み腕も組んで行き 柳五郎

もうやめる口の下から千鳥足 白黒  
 眼がすわり何か言うてる千鳥足 幸仙  
 天災へ百姓両手をあげたまま 柳子  
 天災でくさってしまった麦を焼き 水仙  
 鼻歌でのれんをくぐる千鳥足 宗郎  
 婚礼の謡がつづく千鳥足 久米雄

どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報

何喰わぬ顔が女房をなお妬かせ 吐来  
 知らなんだことで葬式すっぱかり 吸江  
 おとほけの顔で煙草の輪をすつきり 醉々  
 スタミナはついたが財布の息が切れ 明治  
 水虫のスタミナラッシュにまた暴れ 桂馬  
 質問へ軽くとはけている余裕 一步  
 スタミナをタイムカードが示してる 河股  
 失言の急場へとほけた演技見せ 一治  
 とほけてもここは通せぬ税務署 友恵  
 経済とスタミナ主婦の泣きどころ 伊都恵  
 プロレスのスタミナ見入って病床 雄三  
 お借りしていただきましたとほけられ 好郎  
 片言の外語相手に握手されいわを いろを  
 まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報  
 失恋のつらさを水にぶちまけし 幸子  
 蠅一匹夕餉の卓を掻きまわし 飄太  
 いたずらも高度になったと子煩悩 一世  
 蠅二匹仲が良いのか悪いのか 茂児  
 何処へ行くつもりか電車へ乗った 立児  
 長梅雨にわずかの晴れ間恋しがり 扇里  
 蠅叩き持てば止まらぬもどかしさ 節子  
 蠅飛んだあとは殺虫剤の雲 成介  
 他人程親はいたずら苦にしてず 好郎  
 むらくも川柳会 藤井明朗報

満点の偉容崩さぬ錦鯉 正朗  
 満点のきりように惜しい太りすぎ 芳子  
 健康へ赤信号の太りすぎ 福子  
 太りすぎて美容体操つづけても 文子  
 スマートに動けぬ金魚の太りすぎ 芳枝  
 満点の家庭に他人水をさし 祥月  
 満点の味へ叔母は食わず嫌い 夕ケノ  
 何にもかも満点の人みつからず 白汀  
 なんでも満点ついでゆくりが怖くち 秀子  
 せっかくの衣裳泣かせる太り過ぎ さいえ  
 満点の母で良縁また迷し 一郎  
 満点の子が貧しさを忘れさせ 美子  
 仲人は満点にしてはめて去に 孝華  
 太り過ぎ一息入れて越す時 明朗  
 スタイルが気になりだした太り過ぎ 明朗

どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

東の間の人気もう脱ぐものがないし 史好  
 過去のある背中はだかになれぬ人 つき子  
 かまきりのようなはだか夏に耐え 鬼遊  
 大臣の思案明日香に鳥歌い 酔々  
 はだかでも暑い真夏に灸をすえ 生保  
 ノードには弱い男で恐妻家 河産  
 裸の背に一心不乱の蚊の執念 奈々  
 近頃は男もノード売る時代 草春  
 思案してやっぱりやめておく女 修史  
 思案する心父子の距離となり 敏雄  
 子の寝息テレビノードに気を使い 勝恵  
 裸になって家族の信頼深くなり 鶴翠  
 気取ってた彼女も今日はピキニ着る 虎声  
 もう一枚ぎたいはだかもてあまし 儀一  
 幼児のはだかへそだけ手でかくし

裸銭にぎり飛び込む縄のれん  
現実を直視はだかになれない妥協  
心中沙汰他に思案のあるものを  
思案した傘はやっぱり邪魔になり  
新妻のうちは思案もせずに買う  
何気なくはだかになれるうちの夏  
柳

比呂路 弥生 双楽 雄峯 薰風 董柳  
近道は草にうもれた遍路道  
近道をして履物が露にぬれ  
近道は教えず努力させてみる  
近道と思つて行けばつき当り  
道問えば近道までも教えられ  
どの街も貧乏でなしカーブーム  
過ぎたこと言うなと友へ酔いでもやり  
月末の作句入試のように更け  
土砂降りへつばめが働くと急降下  
ふるさとの川に魚の居る安堵  
醉世の句考えている間に熱が引き  
商売するので神にも手を合せ  
つけまつげ涙に濡れまいとする  
紅雨

良心に背く華麗なる花束 克枝  
アリバイがまた崩れ去る付けほころ 秀子  
川柳わかやま 垂井葵水報  
新世帯実家は被害の目をつむる 正夫  
大川端鏡花好みの灯がくだけ 栗  
柳絮飛ぶ少年大きな夢をだく 和美  
興亡をみつめて古都の柳老い 美代子  
だまってきたてへドロを運ぶ川 守子  
近道を来て行き止まり猫柳 春子  
柳腰踊りの姿とどめ居り 泰子  
柳腰されど氣迫に満ちた顔 葵水  
どちらからともなく小川に来て止り 大茂津  
ゴミ捨てる川に昔の唄がない 陽一  
新店へ何の魅力か主婦の列 城石  
乙女の日見た山川にあこがれる 千寿子  
川底を荒すシャベルに魚移転 増蔵  
啄木の詩情柳の淡き青 ちよ子  
新年の誓いも忘れ秋が来る 勇次  
転宅に新旧家具の入りまじり 富子  
新時代まだ大安に左右され 公作  
柳の雨お吉に遠い人おどり ふみよ  
和歌山の奥で素顔の川に逢い 次章

飛び出した客も抗議に加勢する  
熱狂の手に新聞紙まるめられ  
熱狂のルツボ詠りを丸出して  
つなぐ手を離し他人の顔をする  
愛の手をつなぐレジャーに日が足す  
置き忘れ 鉄と共に叱られる  
着る人へ胸ふくらまず裁ち鉄  
鉄箱見つけてすでに研屋居ず  
鉄持ち姿勢が決る華の道  
熱狂をよそにレーサー 孤独なり  
赤電話恋の絆へ触れる指  
捨てた犬拾う子があり木につなぐ  
誘惑をさらりとさげし手をつなぐ  
つなぐ手を振りきり走る子に育ち  
ゴーゴーに酔える境地を知らず生き  
玄関に犬つなぎ居り足とじる  
手をつなぐ螢の光歌のあと  
鉄でも年期もの言うブリキ切り 城石

凡夫 太茂津 佐知子 富子 正夫 智恵女 次章 蘇風 光治  
いたずらをして耳もとでママが好き  
善人のいたずら尻尾が見えている  
花東に聞こうとすれば笑うだけ  
緑衣の女ただいたずらに聖書くる  
タレントのほくら気儘な位置でうけ  
点滅の色人生の走馬灯  
青春のいたずら刃物を研いでみる  
運命のいたずらマリヤ様憎む  
こめかみのほくら動いて妥協せず  
偽物と思えぬ艶で売れ残り  
遠慮などするなとジュース出ただけ  
走る子の手にしっかりとある硬貨  
艶っぽい瞳に気がつかぬ大男  
花東を渡し作戦を練る  
敗者呻く上に花束踊って  
鳩小屋の横小走りに妊み猫  
血走った瞳で反対の手をあげる  
扇水

あぶない声にならない間に倒れ 江  
青空へ歓声が湧く棒倒し 松水  
倒れてもにらむダルマに教えられ 富美子  
カドニウム青田無残になき倒し 一進  
夕焼へうらが出た靴けり返し 芳朗  
露路裏の義理人情に意見され 茶仏  
その裏のうらを知りたい事件記者 城南  
はた目には見えぬ酷しい世帯うら 弘美

高知川柳社(高知市) 川竹松風報

宴会の幹事を下戸が引き受ける 康子  
宴席を抜けば鯉の跳ねる音 伊津志  
末席にいて独酌でぐいと飲み たくし  
お流れを待てず歩が出る土佐の宴 たくし

水粉千翁報  
柳子 澄子 鼓草 柳子 秀子 澄子 克枝 三林坊 里風 扇水 朝慶 朝二 林鶴 豊作 柳水 扇水

九回の裏は残念コマーションル  
うららは朝の体操するところ  
足のうらとりどり見せてする昼寝  
水溜り運動会を決めかねる  
筆先の水満足の息を引き  
出合頭とり肌の立つ暗い道  
肌あらわ夏は女の幸を知る  
ウイロー社(ハワイ)

年長けて愛も憎みも遠いもの  
抱いた子にたたかせる見るにくだい人  
世を捨てて憎みかねたみの外に生き  
一周忌もう憎からぬ人も出来  
憎んで忘れられない恋だるか  
家伝薬なれど秤はキログラム  
ビタミンをアルファベットの順で  
若返る薬がほしい気の焦り  
薬にも毒にもならぬ御人よし  
虫下し砂糖に混ぜる母の智慧  
川柳塔まつえ句会

雨宿り友達できて走り出し  
公害の塵を降らして文化国  
人生の角を曲って来た孤独  
世は変る時の流れを見て暮らし  
デパートで出口聞いている国なまり  
孫の知恵日に口に見えて来た仕草  
底辺で生活の詩の底を掘る  
母の国旗ちの国旗と二本もつ  
強引に押しはみたが嫌に釘  
断絶が家裁でやっとほぐされる  
若葉背に団地の子等のシャボン玉  
こやかに嫁が苦言も受けてくれ

弘子 千太郎 瓢月 柳児 革刃 中島 さま子  
カロ女 万里歩 魔花麗 浮草 泉 水 曉舟 快夢起 拜山 雪女 三石  
唾蟬 越子 文子 湖楽 花子 雪美 可動 醉歩 軒太楼 澄水 鉄花人 千代

バラの花おわり糸瓜に花が咲き  
ベトナムのニュース日本の過去に  
人間の裏目財布を置き忘れ  
売れば買う言葉探すも若きなり  
わが土地よ土の底まで我のもの  
妻に紅要る日女の身だしなみ  
空仰ぐ俺の目月の目と出合い  
城北明朗会

手を引かれながら息子へ  
断絶はあっても親子手のぬくみ  
親子ではないがぐれずに子が育ち  
かあちゃんに違う匂のお母さん  
赤ん坊と親子対面てれくさい  
叱つてる子供の中に俺が居る  
友達のような親子で羨まれ  
好き勝手云うて事すむ水入らず  
親は子を食卓別う世は平和  
親と子が食卓椅子での嫁姑  
仲の良さ車椅子での嫁姑  
ゲバ振う息子親の死には泣き  
蝶を追う子を叱りつつ母が追う  
長雨で七夕さまも悲しかる  
ゴルフでつかと海焦げと思えども  
譲られし席に彼女のぬくみあり  
たばこのみ鼻づ柱は煙突か  
公害のけむり煙突の知らぬこと  
たけはら川柳会

願いごと乗せ笹舟はまっしぐら  
チヨチヨチを覚えたおいの頭まで  
一列を守った僕から売り切れる  
することがないので昼寝すると決め  
笑子

孤呂二 鶴丸 叮紅 通児 晃男 紫吻 祥月 川口弘生報

真四角な窓から空が晴れてくる  
団体の気まま許さぬ旗があり  
喜怒哀楽すっぱり包み降り続く  
万博へ私個人の未来像  
讚美歌に心惹かれる素直な日  
セパレーツ今年こそはと思うけど  
妻に花持たせて音痴すべがなく  
追われる苦しみトップになつてから  
振り返る余裕も出来て  
だまされてだまして仲のよい夫婦  
風鈴のリズム昼寝の夢となり  
賽銭の音へ願いが大きすぎ  
廻されて廻されて芯が出来  
ポートおりてまだ将来を信じ切り  
マイカーで来てジュースしか飲めず  
農繁期昼寝の出来る小商い  
再会へ過去完了のままで燃え  
室内装飾変えてわびしい一人者  
従いて来た人生を妻悔いず  
ポナスがもう出た話ばかり聞く  
木頭へ緞帳静かに落ろされる  
頭打ちですよとホープ笑うてみせ  
コンパの丸は妥協を許さない  
鐘の音奈良には奈良の風の彩  
辛かった思い出を山鳩の鳴く  
妥協ではないが一応引きさがり  
蜜籠忘れず夜露に出して寝る  
イミテーション誕生石を買ふも旅  
あの人は今日の挨拶目をふせた  
イメージにびつたり職場の鬼となり  
欲ばった足疲れさすパビリオン  
伸びすぎる朝顔夢へ梅雨つつく

鬼太郎 清太郎 英詩 郷愁 のり子 法子 大陸 寿美路 一路 秋 貞子 不動 菁居 泉のみ  
延子 淨美 春昇 政己 弘人 幸火 静火 蘭幸 朽子 操舟 房水 松静緑 天石庵 菊醉 紫苑莊

好評発売中

西尾 栞 著

序文 麻生 霞乃 先生  
中島生々庵 主幹

句集「水 鶏 笛」

六〇〇円 共

後藤 梅志 著

「秀句鑑賞と梅志句集」

五五〇円 共

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町

川 柳 塔 社

・ 募 集 ・

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

近作柳樽 (10句) 北川 春巢 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「人 妻」 小浜 牧人 選

「口 笛」 山田 季賛 選

「ピエロ」 渡辺 曉童 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。  
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

— 自選は四句以内 —

近作柳樽 (10句) 北川 春巢 選

九輪抄 (3句) 清水 白柳 選

課題吟 (各題5句以内)

「イノシン」 永尾 英断 選

「賽 銭」 丸川 初甫 選

「最 高」 大西 八歩 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

お買物は  
4都を結ぶ  
大丸へ!



大阪・東京  
大丸  
京都・神戸

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千 百 円 (送料共)

一年分 二千百六十円 (送料負担)

昭和四十五年 九月二十五日印刷  
昭和四十五年 十月 一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

電話 大阪・二七一―三九五番  
電話 京都・三三三六八番

発行所 川柳塔社

・ペンペン草・

★四五年度の二賞も決まった。作家はこの日を目標にこの一年、精いっぱいがんばったことであろう。九月号には佳句が多かったと、ある選考委員が云っていた。誰もが追いつきにくみに情熱をブツつけた証拠である。

★春果氏が選考委員はテストされているようだと言っておられるが、これはあたっていているとおもう。損な役

お疲れさま！ さあ、アリナミンAです……



**健康と心をつなぐアリナミンA**

【効能】= 疲労・神経痛・筋肉痛・眼精疲労（調節障害）

回わりである。

★三年連続で岡山勢が路郎賞に輝いた。これは偶然ではないようだ。岡山勢強し。

★近作柳樹とちがって、同人吟には詩性派や感覚派があまり出てこない。家庭川柳を作れない作家よ、クサらず、秀吟をもって勝負してほしい。

★川柳塔賞の智子さんや君子さんは、まだ二、三年という新人だが、先輩のアドバイスをみなカロリトにしてしまう好作家である。

★改題らしい十月号を六回出したわけである。二賞を設けて五回目だ。「早いなァ」といったら、「ではわたしも五年になりますね」と菓子さんも指を折っていた。

★五年前、故梅里さんに連れられて菓子さんが編集部にきた。ボクはひと目見て「この人はアカン、連れて帰ってくれ」と云った。梅

里さんは「お前ひとりではえらいだろうと思って連れてきたのに、仕事もみんなうちにことわるなんて、いったいどういうことや？」

★柳樹の仕事なんて、何年つとめても金にはならないし、なんの保障もない。そこへこんな若く美しい人がつとまろうはずがない。

★通勤定期も一カ月分より買わなかった。毎日下足棚を見て、「きょうも来ているな」

★「きょうも来ているな」が五年もつづいたわけである。「この字は違う」「この本を認め」五年間の特訓？をよく辛抱してくれたものと感謝している。

★万酷博とか残酷博とか、はめることのきらいな日本人だが、空前の動員数は大阪人の心意気を示めしたのもとして胸を張ってもいいではないか。初期の「万国博を成功させよう」を成功させたのだから。

★いま菓子さんに万博の句を整理してもらっている。次号に総出演してもらう予定である。

★東京オリンピック開催のとき、こんなバカげたことをやるのをジッと見ていられないから、それまでに早く死にたいと云った文豪がいたが、こんどの万博にはそんなことをのたもうた人はいなかった。

★はじめて大阪を六日間もルスにした。松江へ行った「恋人」に逢うためである。いづも（緑之助氏主

宰）や木次むらくも（明朗氏主宰）川柳会や、川柳塔まつえの方々が、せっかく歓迎句会を企画してくださったのに全部おことわりした。あやまります。

★鳥根、米子の方々にたいへんお世話になった。千代さんや瑞枝さんがわざわざ米子からきてくださるし、ご病身の芳子さんも木次から駆けつけてくださった。

★こんどの旅で原稿を急がせ、みなさんにも、ご迷惑をかけた。

（不二田一三夫）

ショッピング・ゾーン

梅田一番地

とにるのす  
くしくまで  
うつつまで  
を皆店  
百



大阪梅田・本城店  
**阪神**  
電話 542-1211

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
昭和四十五年九月二十五日 印刷  
昭和四十五年十月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 十月号

# 大和文華館



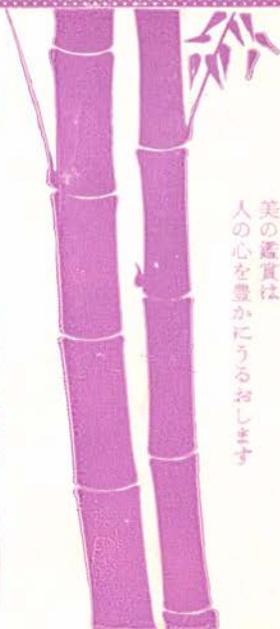
平城京をめぐる山々を一望の静かな環境にある大和文華館は、日本建築の特色に近代美を生かした、香り高い芸術品を、すがすがしい自然の中で鑑賞できる最高の条件をそなえた美の殿堂です。収蔵品は日本・中国を主とした絵画・彫刻・書蹟・陶磁・漆工・金工・染織など、国宝や重要文化財をふくむ日本有数のコレクションです。春秋には「特別展」も開きます。

10時～17時(月曜休館) 入館料100円 子ども60円

電車…近鉄学園前駅すぐ  
自動車…阪奈道路→奈良  
国際ゴルフ場から北すぐ

**近鉄**

美の鑑賞は  
人の心を豊かにうるおします



料理も電話も

**551**

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

定価 百八十円 (送料六円)